

「国際研究発信力強化プログラム・リサーチ C&M 成果報告シリーズ」刊行にあたって

本書は、京都大学学際融合教育研究推進センター・総合地域研究ユニット・臨地教育支援センターが実施している「国際研究発信力強化プログラム・リサーチ C&M」プログラムの成果です。このプログラムは、専攻、講座、学年の枠を越えた複数名の大学院生が、ひとつのグループを組織し、分野、地域を横断する大きな研究テーマを設定して研究することにより、各自の研究課題をより大きな文脈のなかに位置づけ、比較の視点をもちながら研究を実施することを目的としています。海外提携大学の大学院生や若手研究者と国際共同研究をおこない、国内外で研究集会を組織・運営すること、さらに、最終的な研究成果を報告書として編集し、発信する作業すべてを、アドバイザーとなる教員と臨地教育支援センターのサポートのもとで、大学院生が主体的に実施しています。こうした経験をとおして、高度な研究能力とともに、高度なコミュニケーション能力の研鑽を目指しています。

なお、「国際研究発信力強化プログラム・リサーチ C&M」プログラムの実施、および、本報告書の刊行は、平成 26 年度 京都大学全学経費「アフリカ・アジア相互理解のための臨地研究事業実施経費」、および、特別経費（プロジェクト分）「変貌するアジア・アフリカで活躍するグローバル人材の育成」の支援を受けて実現しました。記してお礼を申し上げます。

臨地教育支援センター  
センター長 重田 眞義



2014 Report of Research Collaboration & Management Support Course  
for International Research Output Training

# **Reconsidering Ethnography in Area Studies: From Local Practice to Wider Network**



Edited by Reiko Iida, Kaoru Nishijima,  
Naoki Fukushima, Tatsuro Futatsuyama



京都大学大学院  
アジア・アフリカ地域研究研究科  
Graduate School of Asian and African Area Studies,  
Kyoto University



## 目次

---

はじめに -----	1
編者紹介 -----	3
研究集会の概要 -----	4
研究集会のプログラム -----	6
研究報告	
<b>Tatsuro Futatsuyama</b> -----	9
Reconsidering Ethnography between Materiality and Symbol: from the Case Study Tunisan Olive and Bakara	
<b>Iwan Sumatri, Dias Pradadimara</b> -----	21
The Changing Livelihood and Social Differentiation among the Wana of Central Sulawesi	
<b>Kaoru Nishijima</b> -----	27
Revitalization of Two Kingships in Ketapang, West Kalimantan	
<b>Triyatni Martosenjoyo</b> -----	41
Why our University Public Toilets are Dirty? Case Study at Unhas Public Toilets	

<b>Wahyudin, Aris Baso, Sutinah Made</b> .....	55
Impact Pollution of Marine Environment to the Socio-Economic Consition OPF Fisherman in BATAM city	
<b>Naoki Fukushima</b> .....	65
Local Practice of Farm-land Inheritance: A case Study of Rural Areas in the Mekong Delta	
<b>Erni, Novaty Eny Dunga, Supratman</b> .....	77
Gender Analysis in Agriculture Commodities Management in the State Forest of Kayu Loe Village, Bantaeng District, Bantaeng Regency	
おわりに .....	87

## はじめに

---

私たちは「地域研究研究科」におり、そこで私たちに与えられる博士号は「地域研究」である。それゆえ、私たちは「地域研究」とはどのような学問か、その学問を軸足にしてどのように地域を描いたらよいのか、という事について常に考えているし、考えなくてはいけない。オリエンタリズムやライティングカルチャーといったショックを経た時代に、「地域研究」とは何かということについて喧々諤々とした議論が起こっているが、地域研究者の卵である私たちは、今後どのように「ある地域」を描いたらよいのであろうか。本研究グループが発足したのは、まさにそのような議論を院生談話室で車座になって議論している時であった。そのような使命は我々院生には身に余るかもしれない。しかし、そのような大役を担った議論ほど白熱するものだ。

近年、人類学においてポストコロニアル期に看過されてきた「ホーリズム」の可能性について Otto や Nils が再検討を加え、今後吟味されるべき人類学の一般概念として再提起をしている。さらには、Latour や Callon、Law らが物質や言葉を人と同等の 1 アクタントとしてみることで言語論的転回を乗り越え、ある事象が生成する様をネットワーク的に描こうと試みている。このような手法は、アジア・アフリカの流動的な社会状況下で変化する人々の暮らしを描く際に、有効に働くのだろうか。それによって地域の理解を深めることができるのであれば、どのような民族誌的記述をしたらよいのであろうか。車座になっての議論は尽きることがない。そのような議論を重ねるなかで、我々はその車座を広げ、様々な分野の研究者の前で発表し、意見をもらってはどうかという考えに至った。

我々発表者は、現代アジア・アフリカの地域に暮らす人びとが、ヒト・モノ・コトバのつながりをどのように維持・変容・断絶させているかに注視し、それぞれの対象地域の事例を持ち寄った。具体的には、二ツ山はチュニジアのオリーブの樹とイスラームのバラカ概念が結びつく事例を通して、物質とシンボルがどのように結びついているかを考察する。一方で、西島はインドネシア・西カリマンタン州クタパン県における 2 つの王権の復興現象について考察をおこなっている。2 つの王権の復興は、スハルト体制崩壊後の地方分権化の過程で、地方社会でおきた新たな政治的アクターの台頭と表裏一体の関係にある。他方、福島が報告するメコンデルタ農村の人びとの事例では、従来から知られているような農地の男女均分の相続慣行にとらわれることなく、実際には農家ごとの事情を個別に反映するような多様な土地相続をおこなっており、それがメコンデルタ農村の親族関係の形成を全体として特徴づけるものになることに注目している。

本研究集会は、2015年3月10日にインドネシアのマカッサル、ハサヌディン大学でおこなわれた。研究発表者の内容については次項以降に記した。新たな地域研究の可能性を探究することは先述したように我々院生には大きすぎる使命かもしれない。しかしながら、ここに集った若手研究者たちは、地域や研究対象は異なるものの、ある「地域」を描き出す民族誌の手法を見出そうという共通意識を持ち、ともに議論を重ねてきた。本報告書は、そのような大役に挑む若手研究者の成果をまとめたものである。



## < 編者紹介 >

飯田 玲子（いいだ れいこ）

所属：京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程  
（東南アジア地域研究専攻、連関地域論講座）

専門分野：南アジア地域研究、文化人類学

西島 薫（にしじま かおる）

所属：京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程  
（東南アジア地域研究専攻、地域変動論講座）

専門分野：東南アジア地域研究、文化人類学

福島 直樹（ふくしま なおき）

所属：京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程  
（グローバル地域研究専攻、持続型生存基盤論講座）

専門分野：アジア地域研究、人間生態学

二ツ山 達朗（ふたつやま たつろう）

所属：京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程  
（グローバル地域研究専攻、イスラーム世界論講座）

専門分野：中東地域研究、文化人類学



（編者メンバー、マカッサル・ロサリビーチにて）

## 研究集会の概要

---

研究集会は、先に述べた主旨に沿って、インドネシア、南スラウェシ州の州都であるマカッサル市のハサヌディン大学で主催した。東インドネシアでも有数の名門大学であり、国内外の研究機関との交流も盛んである。

ハサヌディン大学での研究集会は、2015年3月10日に当大学の本部棟の会議室を借りておこなった。研究集会当日は、ハサヌディン大学の積極的な広報のおかげで、ハサヌディン大学の教員や研究者および学生など幅広い方々に参加して頂くことができ、その数は70名に及んだ。今回は、ハサヌディン大学からも発表者を募り、4名の研究者の発表を得ることができた。本研究集会は、西島による研究集会のイントロダクション、およびハサヌディン大学の副学長からの開会の挨拶によって始められた。研究集会は午前の部と午後の部の2つのセッションに分かれておこなわれた。午前の部では、Karmila Mokoginta 先生に司会進行をして頂き、二ツ山、Iwan Sumatri、西島および Triyatni Martosenjoyo がそれぞれ研究報告をおこなった。午前の部の終わりには、ハサヌディン大学の Dias Pradadimara 博士からそれぞれの発表者に対して、誰による民族誌で、そこで論じられる意味は誰にとっての意味なのか、4名の発表者が論じた以外に意味は存在しないのかというコメントを頂いた。昼食をはさんでおこなわれた午後の部では、福島が司会進行を務め、Wahyudin、福島、そして Erni が研究報告をおこなった。そして最後には、Novaty Eny Dunga 博士からそれぞれの発表者に対して、関係論的にある地域の事象を考察する必要性と、それゆえに地域のコンテクストを分厚く記述する必要性が示唆された。本研究集会の最後には、二ツ山が研究集会の総括をおこない、7名の発表者の内容を関連付けながら、地域の動態を多角的に分析する地域研究の視点を提示した。その後、Andi Amri 博士による閉会の挨拶がおこなわれ、この研究集会を契機に、地域研究や民族誌のあり方をハサヌディン大学と京都大学で連携をとりつつ今後も考えてゆこうという激励の言葉で研究集会が締めくくられた。

本研究集会の開催により、学術的知識をよりいっそう深めることができたと同時に、研究集会の運営の方法についても非常に学ぶところが多かった。さらに、本研究集会では、さまざまな研究対象とディシプリンを持つ研究者

が一同に会して発表をおこなったにも関わらず、参加者の間で活発な議論が展開されたことで、参加者たちは地域研究の持つ可能性をあらためて感じることができた。本研究集会は、学際的な地域研究の集会として成功を収めたと言えるだろう。本研究集会を通じて得られた経験を、今後の研究活動に生かしていきたい。



研究集会の打合せの様子



京都大学からの発表者



研究集会の様子

**International Workshop**  
**“Reconsidering Ethnography in Area Studies:**  
**From Local Practice to Wider Network”**

**Tuesday, March 10<sup>th</sup> 2015: Time Table**

Venue: Room A, Rectorate Building, Hasanuddin University

TIME	PROGRAM	PERSON IN CHARGE
09.30-09.50	Registration of Participants	OC
Morning Session		Chair: Karmila Mokoginta, S.S., M.Hum, M.Arts. Hasanuddin Univ
09.50-10.00	Opening Morning Session - Introduction - Opening Remarks	Kaoru Nishijima, Kyoto University Rector/Vice Rector, Hasanuddin Univ
10.00-10.25	Tatsuro Futatsuyama “Reconsidering Ethnography between Materiality and Symbol: from the Case of Tunisan Olive and Baraka”	Student, Kyoto Univ.
10.25-10.50	Iwan Sumatri, Dias Pradadimara “The Changing Livelihood and Social Differentiation among the Wana of Central Sulawesi”	Student, Hasanuddin Univ.
10.50-11.15	Kaoru Nishijima “Revitalization of Two Kingdoms in Ketapang, West Kalimantan”	Student, Kyoto Univ.
10.15-11.40	Triyatni Martosenjoyo “Why our University Public Toilets are Dirty? Case Study at Unhas Public Toilets”	Student, Hasanuddin Univ.
11.40-12.00	Comments and Discussion	Mr. Dias Pradadimara, History Department, Hasanuddin University
12.00-13.30	Lunch	OC
Afternoon Session		Chair: Naoki Fukushima, Kyoto Univ
13.30-13.55	Wahyudin, Aris Baso, Sutinah Made “Impact Pollution of Marine Environment to the Socio-Economic Condition OPF Fisherman in BATAM city”	Student, Hasanuddin Univ.

13.55-14.20	Naoki Fukushima “Local Practices of Farm-land Inheritance: A Case Study of Rural Areas in the Mekong Delta”	Student, Kyoto Univ.
14.20-14.45	Erni, Novaty Eny Dunga, Supratman “Gender Analysis in Agriculture Commodities Management in the State Forest of KAYU LOE Village, Bantaeng District, Bantaeng Regency”	Student, Hasanuddin Univ
14.45-15.05	Comments and Discussion	Dr. Novaty Eny Dunga, Gender and Development, Hasanuddin Univ
15.05-15.35	Closing Session - Report - Closing Remarks	Tatsuro Futatsuyama, Kyoto Univ Dr. Andi Amri, M.Sc. International Office, Hasanuddin Univ

### Wednesday, March 11<sup>th</sup>, 2015: Excursion

Supported by:

1. The “International On-site Education Program (IOSEP) for Global Human Resources”, Kyoto University
2. Makassar Field Station, Collaborative Program between Hasanuddin University and Kyoto University



集合写真（発表者と主催者ら）





# 物質とシンボルを描く民族誌的記述の一考察 ーチュニジアにおけるオリーブとバラカの事例からー

二ツ山 達朗<sup>1</sup>

## Reconsidering Ethnography Between Material and Symbol: A Case of Tunisian Olive Trees and Baraka

**Keywords:** 物質、宗教、オリーブ、イスラーム、バラカ

### Abstract:

This study reconsiders the ethnography of materials and symbols. For this purpose, it explores how the olive tree (material) and Baraka (symbol) are interlinked in Tunisia.

First, the study briefly reviews recent religious studies that concern materiality. The discussion reveals the perspective required to overcome the dualism of the inner world the material world / the dualism of physical things and metaphysical things. From this perspective, area studies, which speaks of the integration of art and science, has the potential to treat “an area” ethnographically, thus overcoming this dualism. However, as certain previous studies have mentioned, a consensus on the way to accomplish this does not exist.

This study next ethnographically explores the interaction in the material world in a certain area and in the symbolic world through the case of the olive tree and Baraka (blessing), which are important linked concepts related to Allah. In addition, this study focus on certain inhabitants who decorate their homes with olive ornaments, who farm olives, who cut olive wood for charcoal, and who do not want to cut down olive trees. From those multiple cases of the treatment of olives, this study explores one string of the olive-Baraka web; in addition, it considers the idea

---

<sup>1</sup> Tatsuro FUTATSUYAMA 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程 グローバル地域研究専攻 イスラーム世界論講座

that if we continue to write of “an area” in area studies, then we will continue to explore the string of the web, both from its material side and its symbolic side.

## 1. はじめに

物質とシンボルが双方に影響を与えつつ成り立っている我々の世界は、どのようにしたら記述できるのだろうか。本稿はそのような記述を民族誌的に行う一試行である。具体的には、チュニジアにおけるオリーブという物質とバラカというシンボルの関係についての事例を通して、双方の結びつきを記述してみたい。はじめに本稿の流れを述べる。まず次節でなぜ物質とシンボルの関係に注視する必要があるかということ、先行研究を簡素にレビューしつつ説明する。次の第3節でチュニジアにおいて、オリーブという物質の特質を描きながら、バラカというシンボルが現れてくる事例を記述する<sup>2</sup>。このような記述法が十全に物質とシンボルの関係を描き出せている訳ではない。しかし、第4節で考察するように、ある物質とあるシンボルの関係を、多様な事例を重ねて記述してゆくことが、ある「地域」の網の目のなかの一本の紐を解くことになるのではないかと考えた。

## 2. 物質を考察することの必要性

なぜ文化や宗教またはシンボルを語る際に物質が必要なのか。本節では紙面の都合上ごく簡素に先行研究で論じられている議論を元にしながら、このことについて論じたい。近年の物質に着目した研究は、その必要性を様々な説いている。例えば、2005年に創刊した *Material Religion* の編者らまえがきには、宗教的实践において物質が果たす役割について次のように述べられている。

宗教は単に抽象的な教義に関与することではなく（中略）、宗教が息づく身体と空間によって考えることができる。宗教は日常的な儀礼行為、巡礼、瞑想、食事、歩行などの感覚的効果を伴う何かのことである。宗教とは、物質的なモノと場所とともに人びとが何かを行い、その行

---

<sup>2</sup> 主にチュニジア南部のC村での出来事であるが、場合によっては他地域の事例含み、その場合には明記した。



為が自身と他者の感覚と経験を構造化し特色付けるということである [Editors 2005: 5]。

より簡素に言うために Hazard の記述を借りれば、宗教実践を心神深さや神への信仰のシンボルによって解釈することは間違いで、むしろ信仰心があるがなかろうが、礼拝などの宗教実践が、信仰深さを訓練づけるということになる [Hazard 2013: 61-62]。私たちは常にモノとの関係を取り結んでいるにも関わらず、ポスト構造主義と構築主義によって固体 (solid) としてのモノが空気に溶かされてしまい [Pels et al. 2002: 1]、いつのまにか空中で言葉を操っていたのかもしれない。Hazard によれば、Geertz が行ったような宗教的信仰と意味の価値化は、権力やディシプリンといった点から宗教をナイーブに引き離し、物質的实践と言説への注視を削いでしまった。一方で、Asad や Mahmood によって物質を通した宗教研究の新しい視点が示されたと言う [Hazard 2013: 60-61]。Asad にとっては、宗教の性向を引き出すものはシンボルの働きばかりではなく、法や制裁、社会制度、身体の訓練などの権力の働きであった [アサド 2004: 40]。イスラームの伝統は、イスラーム世界の制度や実践のなかに埋め込まれたディスコースとして、つまり物質的な世界のなかに深く重なり合っているものとして理解できるのだ [Anjum 2007: 622]。ここに、宗教や文化において物質に着目する視座が提示されている。

議論を先述の Hazard や Asad の論に戻そう。ここで彼らが引き合いに出しているのは、Geertz のシンボルの理解や意味の価値化に対する批判である。Geertz 流の人類学的手法は、(いわゆる象徴人類学のように) 物質的モノと実践を意味やアイデアの象徴として扱ってきたが、そのアプローチこそが物質文化研究の発足をゆがめたと Hazard は述べる [Hazard 2013: 60]。Geertz の宗教の定義は「シンボルの体系」であり物質はシンボルの意味や概念の乗り物として働いている [Geertz 1973: 90, 91]。そこでは、「その属性の説明は、意味を与えるもの、つまり社会に生活している人びとに求めなければならない。(中略) つまり象徴の示すとおりに人びとが知覚し、感じ、考え、判断し、行うときの個々人とその集団の経験の中に求めるべきなのである」[ギアツ 1987: 360-361]。これに対して Hazard や Asad からは、宗教実践における物質は、内面の世界観や宗教的意味、信仰などのシンボ

ルの受容体なのだろうか、物質とそれを伴う実践が、「個々人とその集団の経験」の意味を従順に運ぶことなく、むしろ人の主観を訓練づける権力として働くことはないのだろうか、という批判が飛んだ訳である[Hazard 2013: 60-61]。

しかしながら、本稿があえて「物質」と「シンボル」の間でチュニジアの事例を考察しようと考えたのは、Geertz のシンボルの体系を意識したからだ。つまり、物質を含んだシンボルの体系を考察しなかったからだ。なぜなら、Geertz の網の目やタコの足についての記述をよく読むと、彼が物質に対する視点を持っていなかった訳ではなく、彼が焦点化すべきと考えた点が、「個々人とその集団の経験の中」だったと思われるからだ。Geertz の記述の細部を検討し、彼が物質に対する眼差しも持っていたかどうかを検討するのは、別稿で論じることにするが、本稿ではそれに代わりフィールドの事例を示すことによって物質も入れたシンボル、シンボルも入れた物質を論じ、その可能性を示したい。

### 3. オリーブとヒトとシンボル

オリーブが人の関与なしには生存しえない植物であることから述べる。チュニジア国内に存在するオリーブが自生することはなく、全て人によって栽培されている。さらにチュニジアの中南部においては、人がその土壤に積極的に関与しなければ、オリーブが生育することは不可能だ。オリーブの栽培に必要な年間降水量は 500 mm 前後とされているが、中南部ではその降水量を下回るからだ（調査地であるタタウィン県では 100~200mm、平均年間雨日数 19 日、年間蒸発散量は 1039mm）[Mzabi 1989: 20]。さらに短期間に降る雨は 1 年間に 4000kg/ha の土壤を流出させ地表を削ってゆく。しかしながら、人が山岳地帯の谷間にジュスル（*jusr*）という灌漑設備



写真 1. ジュスル（矢印）によってつくられる農地

をつくることで、降水量と土壌流出の2点は解決される。ジュスルは石垣や土を盛り幅15～50m、厚さ1～4m、高さ2～5mの堰(*tābia*)をつくるもので、その建設には170人日の労働力が必要とされ、それを維持するのに毎年5.1人日の労働力が必要であるという試算がある[Fleskens et al. 2005: 623] (写真1.)。筆者の調査によれば、高さ2.5m、幅14mの堰をつくるのに要する労働力は42人日であった。同地域では、総作付面積のうち93.8%はこのジュスルに頼っているが、それは県の総面積の1.3%にすぎない[Office de Développement du Sud 2012より筆者が計算]。そして、その耕作地の多くにはオリーブが栽培されている<sup>3</sup>。

オリーブ栽培はこの土地では人がつくるジュスルでのみ可能であり、またオリーブの性質がジュスル内で優位に栽培されている<sup>4</sup>(写真2.)。

チュニジアのムスリムは、彼自身がつくるオリーブの樹を神のバラカ(恩寵)と認識することがある<sup>5</sup>。筆者は様々な場面でインフォーマントがオリーブの樹のことを示してバラカと関連付け



写真 2. 点で示されるのがオリーブ google map より筆者加工

る語りを聞いた。例えば、2014年12月24日30代の男性と2人でオリーブの収穫に出かけていた筆者は、朝9:45～夕方17:00まで作業を共にするなか

<sup>3</sup> この耕作地で栽培できる農産物としては、ナツメヤシ、オリーブ、イチジク、アーモンド、エンドウマメ、ヒヨコマメ、レンズマメ、ソラマメ、大麦、小麦などがあり、代表的なものとしては、天水耕地での耕作地がオリーブ4万715ha、穀物1万862ha、イチジク925ha、アーモンド419ha、ナツメヤシ146haであり、オリーブ栽培が突出している[Office de Développement du Sud 2012]。

<sup>4</sup> この地で生えているオリーブは、*Chemlali Tataouine*, *Zalmati*, *Fakhari Douirat*, *Zarrazi Douirat*, *Toffahi*, *Chemlali Ontha* などといった品種である[Oueslati et al. 2009: 5]。

<sup>5</sup> バラカ(*baraka*)について簡素に述べるならば、イスラーム世界における神によってもたらされる恩寵、恩恵、祝福などを示す鍵概念であり、これまでもイスラーム世界をフィールドとしてきた人類学者によって様々に論じられてきた鍵概念である。

で、3回ほど彼がオリーブの実をバラカと語る場面に遭遇した<sup>6</sup>。このように農作業、とりわけ収穫期においては特に農民はバラカと関連づけて語ることが多い[2012年2月19日、2012年3月8日、2014年12月12日、2014年12月24日など]。しかしながら、2013年の収穫期には筆者は住民たちがオリーブを指してバラカを語る場面に遭遇しなかった<sup>7</sup>。不作だったからだ。

チュニジア南部では、2009年から2010年にかけて降水量の低い年が続いた。2010年の年間降水量は29.4mmであり、インフォーマントによれば、この年に多くのオリーブが死滅した。2006年から2012年までのタタウィン県内の収量は、2008-2009年：620トン、2009-2010年：560トン、2010-2011年：65トン、2011-2012年：6795トンであり、2011年と2012年では約100倍の差があったことになる。つまり、インフォーマントがオリーブを指してバラカと語ったコンテクストには、オリーブの収量や降水量と関連付けられていることが示唆できる。

何故オリーブをバラカとみなすのか、インフォーマントにたずねたところ、1) 乾燥にも耐える生命力を持ち樹齢がながいなどといった生態的特性に言及するもの、2) 薬をはじめとするオリーブの利用価値に言及するもの、3) クルアーンに記されていることに言及するもの、という3つのタイプに分類できる。もし、ポスト構造主義的に、もしくは言語論的にこの事象を理解するならば、チュニジア社会において「個々人とその集団の経験の中に求めるべき」なのかもしれない<sup>8</sup>。しかし、本稿ではより物質とシンボルとの関わりに焦点化しながら論じる事にする。

インフォーマントは、「(オリーブが他の樹と違い、バラカが与えられた樹

---

<sup>6</sup> 1回目は11:00頃1本目(品種 *Zarrazi*)と2本目(品種 *Chemlali*)の収穫を終えた時点で(収量は約60kgほど=95-125 TND相当)、「神のバラカだ。満杯のオリーブじゃないか。A(村の男性)は今年は少ないと言っていたが、たくさんあるではないか。神のご加護よ」とつぶやいた。2回目は11:30頃、筆者に対してオリーブの説明をしている時「このオリーブを見て。この実の形はオリーブ油がよく採取できる形なのだ。このバラカをみてくれ」と述べた。3回目は11:40頃、私がオリーブの樹の写真をとっていると「写真をとって、B(Aの兄で筆者の世話人)にこのバラカを見せろ」と述べた。[2014年12月24日、シェニニ村、フィールドノートより]。

<sup>7</sup> 筆者のフィールド調査期間は、2012年2月5日～2012年3月28日、2012年11月20日～2013年2月19日、2013年10月26日～2014年2月21日、2014年7月24日～2015年2月6日である(一時的に村を離れている時期も含む)。

<sup>8</sup> クルアーンにおける記述は6ヶ所あり、そのような説明は別稿を参照[二ツ山 2013: 283]。



であり、かつ神聖な樹とされる理由は) 何故なら、オリーブは長い年月生きるからです。500 年以上も生きるものがあります。タタウィンには 15 年間雨が降らない土地があるが、それでも生きている木があります。それは不思議な事ではないですか。」[2012 年 4 月 7 日、メドニン、二人の男性の会話を記録したフィールドノートより]、「(オリーブの樹がバラカなのは) その生命力からです。オリーブの樹は死なない木です。他の植物が乾燥により枯れている時でも、オリーブの木は常に緑であると言われます。」[2010 年 10 月 23 日、タタウィン、フィールドノートより]といったように説明される。しかしながら、ここで注目すべきは、先述したようにオリーブは人の関与がなければ生育しないということだ。つまり、人がオリーブを生かしているものの、その樹は死なない力をもっており、それがバラカだとみなしているのである。

そのようなオリーブの幹や枝を切る事を忌諱する人もいる。ある 20 代の男性は「私は炭づくりの仕事であるマルドゥーマ (*mardūmat*) の仕事はしたくないです。なぜなら、オリーブを切る事はいいことではないから。それはハラーム (*ḥarām*) です。クルアーンにはオリーブについて多くの記述があります。マルドゥーマで働く人もいます。しかし、老人たちはそれをいいこととは思っていません」[2014 年 10 月 10 日、シェニニ村、フィールドノートより]と語っており、同様の語りをする村人は他にも存在する。



写真 3. 木炭づくりの作業

しかしながら、オリーブの樹の炭づくりは、一部の村人の中心的生業である。マルドゥーマの仕事は 1 個体の樹を 1 週間～3 週間かけて 500～1500 ト

ンの炭を作成する<sup>9</sup>（写真 3.）。その作業の約 80%の時間は、樹の枝、幹、根をノコギリか斧で切り刻む作業である。村でこの作業を行うのは、ごく限られた農民だけである。その理由は、一定の技術を要するために誰もができる仕事ではないことと、先述したようにハラームであるからという 2 つの理由が村内では語られている。

一方で、このマルドゥーマの作業がオリーブを死ななくもさせている。この作業は単に樹木を伐採するだけでなく、次世代のオリーブを育成する役割も担っている。生産性の落ちた個体が炭に変えられるが、その際に必ず萌芽更新によって出ている芽のなかから 3 本程度を選び、それを次世代の樹として育てる（写真 4.）。また根の部分も掘り出だし木炭に変えるが、そのなかから萌芽できる塊根の部分を選びぬき、別の農地に埋めることで、次世代の株を栽培している<sup>10</sup>。このような塊根は一つの個体から 600 個あまり採掘される事もある。つまり、オリーブを切り倒す行為とオリーブを再生させる行為は表裏一体となっている。



写真 4. 塊根と萌芽の一部を選定する作業

<sup>9</sup> 同地域ではオリーブの木炭は 1kg あたり 1~1.2TND で売買される。これは他の樹種の木炭に比べても 20%ほど高価で売買されている。これらの収益は一般的には作業者と樹の所有者で 2 分割される。なお、500~1500kg の木炭は、通常 2500~7500kg の木材が必要となり、それを 1 週間~3 週間で切り出す。

<sup>10</sup> この他にも接ぎ木による栽培方法もあるが、村人は塊根から萌芽したものが最も安定した成長をするとされており、好まれる栽培方法である。30~50 cmほどに切られた塊根は、1 か月ほど水分の多い土壤に埋められ萌芽する。

オリーブの枝を切るのはハラームとも語られるが、一方で切り取られた枝を室内に飾る慣習がチュニジア全土でまれに観察できる。30～40cm ほどに切られた枝が、商店の壁に飾られたり、事務所の受付に置かれたりしている。何故そのようにオリーブの葉を飾るかという、「いいことをもたらすから」といった返答をする場合が多い[2012 年 12 月 20 日、スファックス、フィールドノートより]。オリーブの葉だけではなく、オリーブの樹の形状を真似し室内装飾具として作り変えてもいる（写真 5.）。アルミなどの金属でオリーブのミニチュアの形状をつくり、枝の先に琥珀をつけることがそれぞれのグッズに共通しているものの、その形状の種類や大きさは多様である。聞き取り調査から解ることは、このグッズを飾ることでバラカがもたらされるとみなされている事である[二ツ山 2013: 280-282]。このように人はオリーブの形状を真似て新たにバラカを得るための物質をつくっている。



写真 5. オリーブ装飾具

オリーブの装飾具だけではなく、オリーブの名も様々な場面で使用されている。チュニジアにはオリーブモスクをはじめとして、オリーブ銀行、オリーブラジオ局、オリーブ病院、オリーブカフェといったように、商店などの名前にオリーブの名が付けられることが多い。その理由は、これまで述べてきたようにオリーブがバラカやいいことをもたらす存在だからである。オリーブという名（言葉）はそのようなイメージをおびている。

#### 4. 考察

オリーブは人の手が加わらなければ生育できない土地で育てられているにも関わらず、人はオリーブが乾燥地帯でも生命力が強く死なないとして、それをバラカと解釈している。オリーブの樹を切る事がハラームであると解釈し、それを切ることを忌諱する村人がいる一方で、その作業を生業としている人がいる。オリーブのモチーフを装飾具に作り変える人・それを使用する人や、オリーブという言葉を店名に使用している人もいる。そのような様々な事例をここに断片的に示した。

先述したポスト構造主義や Geertz 的な象徴的理解でこの事象を解釈するならば、「個々人とその集団の経験の中に」オリーブとバラカの結びつきを考察するかもしれない。その考察が間違っている訳ではない。しかしながら、そのような考察からは、農民などのインフォーマントとオリーブの相互行為、またそこからバラカという概念が生成する様は描きづらい。本稿ではオリーブの物質性に注視しつつ、物質がシンボルに対して働きかける様を、逆にシンボルが物質に働きかける様を考察した。

オリーブの物質はバラカ以外にも様々なシンボルと結びつく場合があり、またバラカというシンボルもオリーブによってのみ具現される訳ではない。例えば、収穫のコンテクストにおいて、それらは偶発的に結びつき、それが観察者に露呈した時に、はじめて民族誌に記述することが可能になる。この物質という乗り物によって運ばれたシンボルは、網の目の一つの糸のようなものだろう。しかし、たった一本の糸であろうとも、網の目全体（もしくはタコ）の一部の構造を担っている。「宗教とは、物質的なモノと場所とともに人びとが何を行い、その行為が自身と他者の感覚と経験を構造化し特色付けるとのことである」[Editors 2005: 5]からだ。

また本稿では、人と関わる物質が、人によって大きく変えられている事例も示した。人は周囲の物質を自らが持っている意味の体系に合わせて作り変えることができる。しかしながら、同時に自らが作り変えた物質に対して、神のバラカを感得している訳である。



## 参考文献

- Anjum, Ovamir. 2007. "Islam as a Discursive Tradition: Talal Asad and his Interlocutors" *Comparative Studies of South Asia, Africa and the Middle East* 27(3), pp. 656-672.
- Asad, Talal. 1993. *Genealogies of Religion: Discipline and Reasons of Power in Christianity and Islam*, Johns Hopkins University Press.
- Editors. 2005. "Editorial Statement" *Material Religion* 1, pp. 4-9.
- Fleskens, L., L. Stroonsnijder, M. Ouessar & J. De Graaff. 2005. "Evaluation of the On-site Impact of Water Harvesting in Southern Tunisia" *Journal of Arid Environments* 62, pp. 613-630.
- Geertz, Clifford. 1973. *The Interpretation of Cultures*, Basic Books.
- Hazard, Sonia. 2013. "The Material Turn in the Study of Religion" *Religion and Society: Advances in Research* 4, pp. 58-78.
- Mahmood, Saba. 2009. "Religious Reason and Secular Affect: An Incommensurable Divide?" in Talal Asad, Wendy Brown, Judith Butler, and Saba Mahmood eds, *Is Critique Secular? Blasphemy, Injury, and Free Speech* (Townsend Papers in Humanities; 2), pp. 64-100.
- Mzabi, H. 1989. *La Tunisie du Sud-Est; Géographie d'une Région Fragile, Marginale et Dépendante*, Université de Tunis, Faculte des Sciences Humaines et Sociales.
- Office de Développement du Sud. 2012. *Le Gouvernorat de Tataouine en Chiffres*. Tunis: République Tunisienne Ministère de Développement et de la Coopération Internationale.
- Oueslati, I.; H. Manai.; F. M. Haddada.; D. Daoud.; J. Sánchez.; E. Osorio. & M. Zarrouk. 2009. "Sterol, Triterpenic Dialcohol, and Triacylglycerol Compounds of Extra Virgin Olive Oils from Some Tunisian Varieties Grown in the Region of Tataouine" *Food Science and Technology International* 15(5), pp. 5-15.
- Pels, D., Hetherington, K., and Vandenberghe, F. 2002. "The Status of the Object: Performances, Mediations, and Techniques" *Theory, Culture & Society* 19, pp. 1-21.
- クリフォード・ギアツ 1987. 『文化の解釈学(1),(2)』, 吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘允・板橋作美訳, 岩波書店.

- タラル・アサド 2004. 『宗教の系譜—キリスト教とイスラムにおける権力の根拠と訓練』, 中村圭志訳, 岩波書店
- 二ツ山達朗 2013 “イスラームにおける樹木をめぐる信仰の再考察：チュニアにおけるオリーブの事例から” 『イスラーム世界研究』 6, pp. 274-292.

# **The Changing Livelihood and Social Differentiation among the Wana of Central Sulawesi**

Iwan Sumatri<sup>1</sup>, Dias Pradadimara<sup>2</sup>

**Keywords:** Wana, Sulawesi, Indonesia, rattan and resin economy

## **Abstract**

This paper addresses the changing livelihood faced by the Wana, a community in Wawosolo and Marisa, Morowali Nature Reserve, North Morowali regency, Central Sulawesi, Indonesia, as a result of continuous global transformation. Rather than looking at members of this community as merely “victims,” this paper examines the ways in which some Wana are creatively appropriating some elements of these changes and emerging as active participants in the transformation. The research was conducted as an ethnographic study combined with a diachronic historic study, and data were obtained from both short trips and extended stays to Morowali Nature Reserve in 1999, 2001, 2006, and 2013. This information was combined with results of observation and deep interviews performed in October 2013 in Wawosolo and Marisa. Findings reveal that, in the contrast to popular opinion, the Wana are managing to cope with changes to their livelihood. Resistance toward unfair trade conducted by outsiders is manifested in Wanas’ taking control of rattan and resin trade from the middlemen living in Kilo Dua, providing Wana people the freedom to sell these two commodities directly. The commodification of rattan and resin has created a surplus for certain clans in Wana community, which has enabled some Wana to own properties and provided them with a new urban identity. Research identified a new structure in the Wana community—namely, employer-employee relation—as a result of this resin and rattan economy. Control of employees becomes easier when there is a decision to stay. The economic situation has also rendered some small rituals and the role of traditional healers obsolete in the Wana community.

---

<sup>1</sup> Graduate Student of Universitas Hasanuddin, Makassar, INDONESIA

<sup>2</sup> Lecturer in History Department, Hasanuddin University

## 1. Introduction

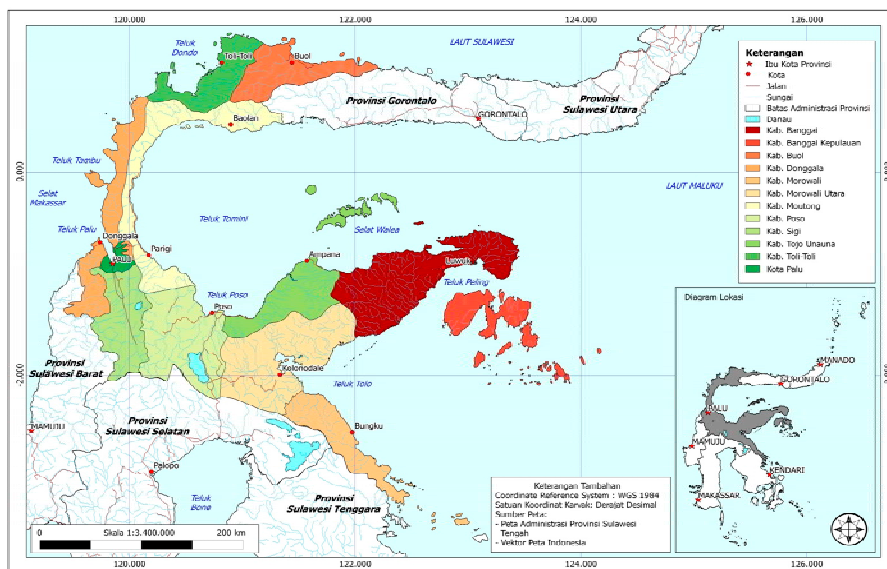
Most communities throughout the world, even those in remote areas, are connected in one way or another to “outside” communities. Ideas, goods, and government officials—to mention a few examples—have arrived in these communities somewhat regularly. It can be argued, however, that these communities became intensely integrated with the global market during the 19th century expansion and stable formation of the Dutch colonial states in Indonesia, and more so in the 20th century during the dawn of the modern era. This integration asks for different forms of relations (economic or otherwise) between the local communities and their global counterparts, and demands that different goods be transformed into commodities from and for each community. Before most members of the communities become aware of the situation, the social world in which they live has been transformed, with new roles emerging and past (often important) positions becoming obsolete. This is a familiar story for many communities in the world, and this, too, is the story of the Wana.

As anthropologist Tania Murray Li has written in several of her important papers [2002a, 2002b], the integration of local communities with the global market and nation-states has brought about transformation and created a new “agrarian differentiation.” Li’s papers align with a definition of this by Benjamin White [1989], as “a cumulative and permanent ... change in the ways in which different groups in rural society—and some outside it—gain access to the products of their own or others’ labor, based on their differential control over production resources and often on increasing inequalities in access to land” [Li 2002a, 89 and 2002b, 417]. This powerful quote instructively suggests that the differentiation that emerges among local communities, and indeed the integration with the global market, creates changes in livelihood as new demands are made (and met) for commodities by the members of local communities. In addition, as a consequence, new “inequalities” in access to resources are created.

It is important, however, to look at the process of integration and the roles each actor plays in this integration before assigning the role of passive victims to members of local communities. As is the case among the Wana, some have creatively appropriated new elements and new demands from the changes and are active participants in a new local economy. When viewed from these perspectives, we can recognize the agency that local players possess in their encounters with the changing world.

## 2. The Wana of Morowali

Despite the few writings that have been published about the Wana, one comprehensive paper on them appeared in the early 20th century. The Dutch missionary A. Kruyt wrote several reports on various communities in central Sulawesi, including the Wana, and wrote a 200-pages account of the Wana that was published in the journal *Tijdschrift voor Indische Taal, Land, en Volkenkunde* in 1930. More than 50 years later, an American anthropologist conducted her research among the Wana and published a book and several articles on different aspects of this population [Atkinson 1983, 1989]. Wana is a Bare'e-speaking community that now lives in the Province of Central Sulawesi, and according to a 1998 registration record, there were only 1,784 members of this community and thus far no more registration has been done. During the time of my research, only about 10% of the Wana actually live in the Morowali Nature Reserve. In the past, their livelihood depended on rice shifting cultivation and hunting.



Peta No. 1 Peta Administrasi Provinsi Sulawesi Tengah

Though the Wana settled in the Nature Reserve they are not by any means isolated from the wider world. Being a small community, the Wana strategically acknowledged the authorities of their various neighbors—even their distant neighbors. For example, they at least nominally acknowledged the superior position of the Mori (their neighbor to the West), the Tojoto to the North, and even the Sultanate of Ternate, in northern Maluku. It was not until

the arrival of the Dutch Indies colonial government in the early 20th century, however, that the Wana became effectively a part of—and directly experienced the presence of—larger state authority. As part of the colonial policy, Wana had to pay taxes, resettle in the lowland (or more accessible areas for the colonial authority, and lived in more or less permanent settlements—which, most understandably, they resented. For the Wana, the changing authorities—from the Dutch Indies, the Japanese, and now the Indonesians—each required them to perform obligations which they felt had nothing to do with their culture. The Wana preferred “*tare agama, tare kampong tare pamarentah*” (“no religion, no settlement, no government”).

### 3. Changing Livelihood

Rice shifting cultivation practiced by the Wana is not merely an agricultural practice that results in rice production, even if that is eventually the harvest they reap). For the Wana, rice cultivation is a part of their being together with nature, and many steps in the cultivation practices are accompanied by gift-giving rites (*kapongo*). Depending on the soil condition and other events that they believe have predictive indications (such as a death in the family or serious sickness) to stay or leave the existing land, they shift their land every several years (from between two and six years). This situation, however, began to change in 2000.

In the mid-1980s, a man named Dandi from the neighboring Mori—who later married a Wana woman—came to a Wana settlement in Langitoya and expressed interest in purchasing rattan. The rattan would then be floated down the Morowali River to be collected. This encounter would signal the beginning of the Wana’s involvement in the global market, as previously the rattan they gathered in the local forest would go through various collecting stages (and middlemen’s hands) before eventually being shipped abroad as an export commodity. Rattan (and to some extent, resin) was Wana’s primary commodity as the Wana became the laborers that “produced” the rattan, the rattan trade prospered. Soon enough, gathering and collecting rattan became an important part of Wana livelihood, much more so than rice cultivation. If before 1990 the Wana were known to be the suppliers of rice for their neighboring communities, since the early 2000s, it is the Wana who rely on rice bought elsewhere.

#### 4. Social Differentiation: *Om Jima*

*Om Jima* is one of the elders among the Wana. In Marisa, one of the Wana settlements, he has the biggest house, equipped with a large television and an electric generator to provide electricity—all signs that the owner is the “big man” among other members of the population. *Om Jima* is a nephew of Dandi—his aunt married Dandi and this link opened up economic possibilities for him. He slowly took over the role of middleman for the rattan trade that was previously held by a Bugis trader.



But *Om Jima* not only emerged as an important figure that connected Wana to the global trade market, but as a powerful figure within the world of the Wana. If in the past the role of chief was less fixed, with the combination of both symbolic capital (all the commodities as displayed in the house) and actual access to financial capital (trade), *Om Jima* has stabilized the appropriate authority and fixed it on himself.

#### 5. Concluding Remarks

Change and transformations are inevitable, even for those who live in a remote corner of Central Sulawesi. The Wana have experienced these changes from pre-colonial eras to the modern era and have adopted accordingly. Televisions, refrigerators, wristwatches, and even smartphones are now part of their “signs of being modern” (even if

electricity is not consistently available). More importantly, however, is that they do not simply play the role of passive participants or even victims.

## References

- Atkinson, J. M. 1989. *The Art and Politic of Wana Shamanism*. Berkeley: University of California Press.
- Atkinson, J. M. (1983). Religions in Dialog: the construction of an Indonesian minority region. *American Ethnologist*, Vol. 10: 684-696.
- Kruyt, A.C. 1930. De To Wana op Oost-Celebes. *Tijdschrift voor Indische Taal, Land, en Volkenkunde*, Vol. 70: 398-625.
- Li, T. M. 2002a. Agrarian Differentiation and the Limits of Natural Resource Management in Upland Southeast Asia. *IDS Bulletin*, Vol. 32, No. 4.
- . 2002b. Local Histories, Global Markets: Cocoa and Class in Upland Sulawesi. *Development and Change*, Vol. 33, No. 3.
- Riccardi, C. L. 1999. Indigenous Swidden Agriculture of The Wana Within The Morowali Nature Reserve of Central Sulawesi, Indonesia. MA thesis. Athens: Ohio University.
- Rutherford, D. 2003. *Raiding the Land of the Foreigners*. New Jersey: Princeton University Press.
- Scott, J. C. 2008. *Weapons of the Weak: Everyday forms of peasant resistance*. Connecticut: Yale University Press.
- Sudaryanto, I. Yuli. 2005. *Kesukuan dan Pertentangan Agama di Cagar Alam Morowali. Kasus Orang-orang Wana di Kayu Poli, Sulawesi Tengah dalam Hak Minoritas, Dilemma Multikulturalisme di Indonesia*. Jakarta: The Interseksi Foundation.
- Sumantri, I. 2006. Orang Wana: Adat, Hidup, Hutan, Pertanian, Paradoks, Dan Hari Esok dalam Kebudayaan, *Jurnal Penelitian dan Pengembangan Kebudayaan*, Vol: 1, No. 1. Jakarta: Pusat Penelitian Dan Pengembangan Kebudayaan Departemen Kebudayaan Dan Pariwisata.
- . 2014. Damar dan Rotan. Studi tentang Dinamika Struktur Orang Wana. MA Thesis. Makassar: Universitas Hasanuddin.
- Tahara, T. 2014. *Melawan Stereotip*. Jakarta: Gramedia.



# 西カリマンタン州・クタパン県における 2 つの王の

## 復興現象に関する一考察

西島 薫<sup>1</sup>

### Revitalization of Two Kingships in Ketapang, West Kalimantan

**Keywords:** 地方政治、王権復興、地方分権化

#### **Abstract:**

This paper investigates the revitalization of local kingships in the Ketapang Regency of West Kalimantan, Indonesia. Since the fall of the Soeharto Regime, local kings have reappeared all over Indonesia. However, only a few studies on this phenomenon have been conducted to date. Furthermore, previous scholarship gives only a limited explanation of how local contexts have made it possible for kings to reemerge. Because the local contexts behind this revival remain obscure, it is necessary for future studies investigate these contexts more closely. This preliminary report examines the process of reviving traditional kingships and discusses the local context behind this phenomenon through a case study of the reemergence of two historically related kings in the Ketapang Regency. The Matan king, who is a Melayu king, returned to prominence in 2009. The Ulu Aik king, who is a Dayak king, suddenly emerged into public arena in 1998, and has since experienced the drastic changes following the political reformation. In the first part of the paper, I introduce the origin myth and folklore that explains how these two kings are related. Then, I provide an overview of the history of these two kingships, including how their inheritors retreated from prominence after World War II. The Ulu Aik king reemerged at a large ritual in 1998. On the other hand, the Matan king has revived

---

<sup>1</sup> Kaoru NISHIJIMA 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程 東南アジア地域研究専攻 地域変動論講座

his role by establishing a close connection with an influential local figure. Finally, I give my preliminary conclusion that several prominent local actors are involved with the revitalization, which suggests that this phenomenon is closely related to local politics in the Ketapang Regency. In closing, I suggest a possible direction for my future fieldwork.

## 1. はじめに

本稿では、現在継続中の西カリマンタン州クタパン県における2つの王の復興現象に関する現地調査について概観する。まず、調査対象の概要を述べ、その後、インドネシア各地で頻発している王権復興現象に関する先行研究について概観する。その上で、現在までの調査研究によって得られた資料から、当該地域の王権復興現象の背後にある政治的文脈について分析する。最後には、暫定的な結論および今後の展望をしめす。本調査は現在継続中のものであり、経過報告としての側面もある。今後の調査によってさらなる修正が加えられること、及び本稿で扱う2つの王の記述に関してはウル・アイ王を中心に調査を継続していることもあり、偏りがあることを予め記しておく。

## 2. 王の復興現象の先行研究

スハルト政権の崩壊後の改革の中でインドネシア各地ではかつての王権の復興現象が相次いでいる。しかし、インドネシア各地で起きている王の復興現象についての先行研究は、クリンケン [2007] を除いては皆無であるといっていよい。クリンケンは、民主化を促進するはずのインドネシアの地方分権化が、なぜ逆説的にインドネシア各地で王たちの復興現象という旧来権力の復興をもたらしたのかという政治学的視点から、王の復興現象を分析している [Klinken 2007]。特に、西カリマンタンの事例では、民族紛争の中で民族の象徴として王が復興したという分析をおこっている。しかし、王たちの復興の背後にあるアクターに関する言及は限定的であり、具体的にどのような過程あるいは政治的背景の中で王国が復興したのかについては明らかにされていない。少なくとも西カリマンタン州クタパン県においては、王権の復興現象は地方社会の政治的文脈と表裏一体の関係にある。どのような主体が介在しているのかに関して微視的な視点から分析をおこなうことで、王権復興の動態を捉えることが出来る。

### 3. 西カリマンタン州・クタパン県の外来王と起源王

調査対象地のクタパン県は、西カリマンタン州の南部に位置する。クタパン県の中心を北東から南西にかけてパワン川が流れている。パワン河は上流でさらにクリオ川とビハッ川に分かれる。クタパン県の特徴は、このパワン河の川下と川上にそれぞれ王が存在することである。パワン川下流にはマレー王権のマタン王国があり、上流のクリオ川にはダヤック王であるウル・アイ王が存在する。以下の起源神話および口承伝承でみるように、地元の人々の間では、両王権は「年長／年少」の関係にあると考えられている。

現在、ダヤックの王であるウル・アイ王は、51代目のシンガ・バンサ (Singa Bansa) である<sup>2</sup>。ウル・アイ王は、クタパン県ウル・スンガイ群バヌア・クリオ村スングワン集落に居住している。ウル・アイ王は、ボシ・コリン・トンカット・ラヤット (Bosi Koling Tongkat Raya'at) という短剣の神器を管理している。この神器は目で直接見ると失明すると信じられており、神器を管理するウル・アイ王には、数々の禁忌が存在する。例えば、カレットを収集してはならない、家畜の豚、水牛やパイナップルを食べてはならない等の数々の禁忌に服する。このような数々の禁忌は神器から派生するものであり、禁忌を犯した場合は病気になると考えられている (写真 1.)。



写真 1. ウル・アイ王の邸宅

<sup>2</sup> この 51 代目は、ウル・アイ王による説明である。しかし、初代のドゥフン・キウン、46 代目バンサ・パティ、47 代目イラ・バンサ、48 代目プティンギ・ジャンプ、49 代目ベベック、50 代目ポンチンそして 51 代目シンガ・バンサを除いては、名前は知られていない。

マタン王国は、14 世紀に端を発するとされるムラユ王権である。マタン王国は、歴史的にクタパン地域の中で移動を繰り返してきたが、最終的にはムリア・クルタに移動している。マタン王国の最後の王は、30 代目の王であるとされるグスティ・ムハンマド・サウナン (Gusti Muhammad Saunan) である。グスティ・サウナンは、ジャワ島で教育を受けた後にクタパンへ戻りマタン王に即位する。しかし、日本軍政期の 1944 年、西カリマンタン州の他のマタン王国の貴族とともに虐殺される。現在でも、ムリア・クルタには王宮が残っており、周囲には多くの末裔たちが住んでいる。現在では王宮に居住している者はおらず、王国の末裔によって管理されている (写真 2.)。



写真 2.マタン王国の王宮

#### 4. 王権の起源神話

2 つの王権が「年長／年少」の関係にあるという言説は、クタパン県内では広く聞かれる。この言説は、王権の起源神話および口承伝承にもとづいている。以下、王権の起源神話および起源神話から両王権の関係性について考察する。王権の起源神話および口承伝承は以下のようにまとめることができる。

プブ・タグアという土地に、かつてシハック・バフルン (Siak Bahulun) という首長が住んでいた。ある日、シアック・バフルンは畑から巨大な竹を持ち帰ってきた。この竹を割ったところ、7 人の少女が出てきた。その後、ダヤン・プトゥンはクリオ川へ捨てられた。ダヤン・プトゥンは、パワン河の下流にて、ランガ・スンタップ (Rangga Sentap) という者によって拾われ育てられる。同じ頃、プラブ・ジャヤ (Prabu Jaya) というマジヤパヒト王国の

王族が同地を訪れる。ダヤン・プトゥンとプラブ・ジャヤは縁組を結び、マタン王国の前身とされるタンジュンプラ王国を創設した。これがマタン王国の起源神話である。そして、神話によるならばシアック・バフルンこそがウル・アイ王なのである [Lontaan 1975: 76-80] <sup>3</sup>。

このダヤン・プトゥンに関しては、クリオ川流域では、さらなる神話が存在する。ダヤン・プトゥンは、親をさがしてクリオ川に戻ってくる。しかし、親は既に他界しており、兄弟たちもすでにダヤン・プトゥンについて覚えていなかった。そこで、兄弟たちによって「台所の土」(Tanah Dapur) を割り当てられた。その代わりに、ダヤン・プトゥンは、土地の所有者として耕作物の支払を要求する。この契約は、「ダヤン・プトゥンの誓い」とよばれている [Stepanus Djueng et al. 2003: 131-132]。現在でも、「アダットの支払い」(Bayar Adat) は存在し、毎年、収穫物は儀礼的にダヤン・プトゥンに対して支払われる。特に、クリオ川ではカンブット (Kambut) と呼ばれる収穫儀礼において、土地の所有者であるダヤン・プトゥンに対してこの支払いがなされると考えられており、「アダットの支払い」を怠れば、災厄に見舞われると信じられている。また、クリオ川でもかつては、マタン王に貢納を捧げていたという伝承が残っている。マタン王国の末裔の中にも、かつてクリオ川の近隣地域から米を運んできたことを記憶している者も存在する。

この2つの神話を合わせて考察すると、2つの王権の性質がわかる。つまり、外来者であるプラブ・ジャヤは、土地の姫であるダヤン・プトゥンと縁組を結ぶことで、王国を創始したのである。他方で、ウル・アイ王はダヤン・プトゥンの親でもあるのである。この神話は、島嶼部の他地域で広くみられる、外来者が土地の姫と婚姻を結ぶことで、正当な土地権を得て王となる外来王神話と同じ構造である。マタン王を「外来王」であるとするならば、ウル・アイ王は「起源王」なのである。ウル・アイ王が「年長」であるということは、現在でもマタン王国の末裔の間では広く認められている。マタン王国の末裔の間では、かつてマタン王国で儀礼がとりおこなわれるさいには、必ずウル・アイ王は召喚されており、ウル・アイ王が到着する前には開始の合図であるゴングの音は鳴らされなかったという伝承も残っている。

---

<sup>3</sup> シアック・バフルンとウル・アイ王を同一とみなさない神話のバージョンも存在する。異なる神話に関しては、Stepanus Djuwen [1999] を参照。

## 5. 改革以前の両王権

復興の前史として、第2次世界大戦の戦中から改革以前までの両王国の前史を概略する。戦中及び戦後期には両王権は大きな変革をこうむる。そして、改革以前までに、ウル・アイ王およびマタン王国の末裔は歴史の中に埋没していく。

1942 年、日本軍がボルネオ島に上陸する。日本占領期のウル・アイ王は、48 代目であるプティンギ・ジャンプであった。日本占領期には、クタパン地域は非常に混乱した状況であった。この当時、日本軍上陸の影響を避けるため奥地へと逃避した者も存在する。この頃、ウル・アイ王のもとに多くの人々が集まり加護を求めるようになる。プティンギ・ジャンプは、この状況を見て、ウル・アイ王の権威の及ぶ範囲を、デサ・スンビラン・ドモン・スプル (Desa Sembatilan Domong Sepuluh; 9 つの村・10 の首長) として宣言した [Muli 2008]。日本軍の上陸という混乱状況にあったことを鑑みるならば、デサ・スンビラン・ドモン・スプルという領域は、突如出現した神器の影響力を認める領域であるということになる。日本占領が終焉する前に、プティンギ・ジャンプは死去する。王位は、末子のベベックに委譲されることになる。ベベックに関しては、歴史資料が存在する。ムリアウ地域の長から行政官に宛てた報告には、1946 年の、「ダヤック族の神器を管理するウル・アライ王」(Raja Huloe Arai jang memeliara tongkat poesaka orang2 bangsa Dajak) が、当時の政府の状況に関する説明を求めて、現在のサンガウ県を訪れたことが記されている。1957 年にも再び同地域を訪れており、サンガウ県ムンギンジャン村に「神器の柱」を建立している。また、1966 年には当時の県議会である DPRD-GR の議員の就任儀礼の際、宗教に入信していない議員がウル・アイ王を召喚して就任の宣誓をおこなったという。1973 年、ベベックは死去し、長子のポンチンに王位は継承される<sup>4</sup>。ポンチンの頃には、年に 1 度の大規模儀礼を除いては、その後、1997 年の大祭マルバにて、神器を管理する体力的限界を理由に、ポンチン王位を退くことになる [Muli 2008]。その後、ベベックの末子であり、ポンチンの末弟であるシンガ・バンサに王位は継承される。

日本軍の上陸の直接的影響を受けなかったウル・アイ王とは対照的に、マ

---

<sup>4</sup>本来ならば、王位は末子に相続されるのが通例である。しかし、末子が幼い場合、神器は長子に相続される。



タン王国は日本占領の直接的な影響を受けた。もっとも象徴的な事件がマンドール事件である。この事件では、反逆を企てたという嫌疑をかけられた、グスティ・サウナンを含む多くの西カリマンタンの王族たちが、ポンティアナックに召喚され虐殺される。この他、クタパンでも反勢力と目された多くの貴族たちが虐殺されている。他方で、日本軍による虐殺を逃れた貴族も存在する。例えば、グスティ・クンチャナは、ポンティアナックに向かう途中で、荷物を取りに戻るということでポンティアナック行きの船をおりたため、日本軍による虐殺を逃れた。日本軍による虐殺を逃れた貴族は、その後の移行期の地方政府であるスワプラジャ、スワタントラの政治組織の中に組み込まれていく。日本軍撤退後のオランダ統治化では、マタン王国はマタン王国政府会議（Majelis Pemerintahan Kerajaan Matan; 以下、MPKM）として組織化される。生き残った貴族のうち、ウティ・ハリル、ウティ・アプラ及びグスティ・クンチャナの3人の貴族がMPKMに役職を得るが、その他の下位の貴族たちは王国の外の職を求める。スワタントラの解体とともにMPKMも消滅し、王国は事実上、完全に解体する。1989年、スハルト政権時代のオルデ・バルの時に、グスティ・クンチャナの息子であるグスティ・ファドリンたちにより王国の伝統保持を目的とした貴族の末裔による小規模な団体が組織されたのみであり、活動が活発化するのにはスハルト政権崩壊後の改革後である。

改革前の時期においては、ウル・アイ王は周辺地域において儀礼的権威であり続けた。他方で、マタン王国は末裔の多くが虐殺されたこともあり、スワタントラ解体後は歴史から姿を消すことになる。

## 6. 改革後のウル・アイ王

改革以前まで、地域的な権威であったウル・アイ王は、1998年の改革期に再び大衆の面前に出てくることになる。改革の前後、ジャカルタでは暴動が頻発していた。クタパン県の人々の間では、このような暴動の波がクタパン県まで押し寄せてくるという懸念があり、特に華僑に対する脅威が広がっていた。このような改革期の混沌とした状況を、スハルト政権の中央集権体制下で抑圧されていたダヤック人たちの存在を知らしめる好機とみたダヤック人のカトリック教会の司教は、トラック・バラ（Tolak Bala; 除厄儀礼）の儀礼を企画する。クタパン県中のダヤックの呪術師や有力者がクタパン市内へ

召喚された。その中でも、司教の狙いはウル・アイ王を大規模儀礼とともに大衆の全面へ担ぎ出すことであった。この大規模儀礼を実行するための実務面の支援は、NGO 組織パンチュール・カシの創設者であり、地域社会の有力者であるメチェルがおこなった。この儀礼によってクタパン市内に巨大なトラック・バラ像が建立される<sup>5</sup>。

この大規模儀礼の中で、日本占領期に現れたデサ・スンビラン・ドモン・スプルは再び実態を帯びたものになる。大衆の全面に担ぎ出されたウル・アイ王は儀礼の開始の挨拶で以下のような5つの宣言をおこなう。①「我々、デサ・スンビラン・ドモン・スプルは、統合と統一を希求する」②「我々、デサ・スンビラン・ドモン・スプルは、改革を支持する。しかし、多くの社会を破壊し、損なう方法は拒絶する」③「我々、デサ・スンビラン・ドモン・スプルの者は、パンチャシラと1945年憲法を支持する」④「我々、デサ・スンビラン・ドモン・スプルの者は、デサ・スンビラン・ドモン・スプルの安全に対して責任を負う」⑤「我々、デサ・スンビラン・ドモン・スプルは、この民族を構成する者として、西カリマンタン中の社会、特にクタパン県の社会に加護を与えることに責任を持つ」。この儀礼と合わせて、「デサ・スンビラン・ドモン・スプルのダヤック社会の決定」をおこなう。この決定の中で、ウル・アイ王の名のもとに、スハルト政権期に中央政府の傀儡組織として作られたダヤック系組織であるデワン・アダット・ダヤックのクタパンを糾弾している。この決定には21のクタパン県のドモン<sup>6</sup>や、有力者が署名を行っている。2001年にも再び、トラック・バラによってウル・アイ王は大衆の面前に姿を現すことになる。司教によれば、この儀礼は中カリマンタン州でのダヤック人とマドゥラ人の紛争がクタパン県に及ぶことを阻止する目的と同時に、当時副県知事でありダヤック出身の政治家であるローレンス・マジュンを支援するという政治的目的があった。この儀礼において、ウル・アイ王によって「トラック・バラ像」の管轄権がローレンス・マジュンへと委譲される。

ウル・アイ王の登場後、パンチュール・カシの派生組織であるダヤコログの発行する雑誌、カリマンタン・レビューや、ポンティアナック・ポストと

---

<sup>5</sup> 本稿の記述は、ユリ司教とのインタビューによる。また、John Bamba [2002] も98年のトラック・バラ儀礼について詳細な説明をおこなっている。

<sup>6</sup> ドモン (Domong) とは各村落のアダット長のことである。



いった地方紙でもウル・アイ王に関する記事が紹介されるようになる。2007年には、県知事決定によってスンクワン集落の伝統家屋の管理者であることが決定される。ウル・アイ王によれば、このことこそがウル・アイ王が初めて「政府」に認められた証拠なのだという。さらに、県政府からは定期的に給与が支払われるようになる他、ウル・アイ王がおこなう大規模儀礼の時には財政的援助を受けるようになる。

ウル・アイ王自身は、クタパン、ポンティアナックやスラバヤなどで開催される会議に招待されるようになる。特にビオ・ダマールといった反アブラヤシ・プランテーション活動を展開する地元 NGO との結びつきを強めていき、ウル・アイ王自身も一時的に反アブラヤシ・プランテーション運動に傾倒していく。2011年には、他の地方有力者とともに、地元住民との同意なしにクリオ地域において開発をおこなったプランテーション企業に対して、西カリマンタン州の森林局の前で儀礼的制裁を課している [Pontianak Post 2011-2-11]。

地方メディアや全国区の会議の中にも姿を現すようになる一方で、ウル・アイ王は儀礼的な影響力という面でも影響力を強めている。49代目ベベックが建立した1本の「神器の柱」は、現在では13本に増加している。現在でも、ウル・アイ王は、儀礼をとりおこなうために「神器の柱」のある地域へ出かける（写真3.）。ウル・アイ王は、改革後の混乱の中で、カトリック教会の司教、NGO 及び地方メディアと密接に結びつきつつ着実に影響力を伸ばしている。



写真3. オルガ・ディン村での「神器の柱」を洗う儀礼

## 7. モルケス王国下でのマタン王国復興

マタン王国が復興を果たした背景には、県知事を 2000 年から 2010 年までの 2 期務め県政治にて絶大な力を持つモルケス・エフェンディの援助がある。2001 年、マタン王国の末裔たちによる初めての大集会によって「マタン・タンジュンプラ王国家族連盟」(Ikatan Keluarga Besar Kerajaan Matan Tanjungpura; 以下、IKKRAMAT) が結成される。開会の挨拶の中で、モルケス・エフェンディはスハルト期において支配的な唯一のアクターであった政府は、改革の中で民衆の「ファシリテーター及びモティベーター」としての役割が増大する旨を述べる。2009 年には盛大な戴冠儀礼とともに 3 人の末裔から構成される「マタン王国議会」(Majelis Kerajaan Matan) が組織され、マタン王国が正式に復興する。

「ファシリテーター及びモティベーター」という言葉通り、モルケス・エフェンディは、マタン王国の王宮の改築、王国関係の遺跡の改装など、王国の遺物に対しての援助をおこなう。この王国の末裔への支援は、モルケス・エフェンディの政治戦略にとって大きな意義があった。IKKRAMAT は援助の見返りとして、モルケス・エフェンディに、キアイ・マンク・ヌガリ (Kyai Mangku Negeri : クニを創りし者) という称号とともに、マタン王国の「特別なる王国の成員」(Anngota Keluarga Kerajaan Luar Biasa) としての地位を与える。このことにより、モルケス・エフェンディは、マタン王国とは関わりを持たないにも関わらず、末裔からマタン王国の末裔の代表としてインドネシア各地及び国外で開かれる集会などに列席する資格を与えられる。さらにモルケス・エフェンディは、巨大なムラユ式伝統家屋であるルマ・アダット・ムラユ・キアイ・マンク・ヌグリを建て移り住む。この伝統家屋は王宮を模したようなつくりになっており、モルケス・エフェンディの政敵からは、「(モルケス・エフェンディは) 王にでもなったつもり」であると揶揄される (写真 4.)。

マタン王国の伝統を擁護し、王国の末裔を代表する資格まで保持し、新たな「王宮」に住むモルケス・エフェンディだが、クタパン県内ではモルケス・エフェンディは王国の末裔でもなければムラユ人でもないという話が広く聞かれる。クタパン県内では、モルケス・エフェンディはバタック人を父に持つという話が公然の事実として語られる。モルケス・エフェンディが貴族の末裔と緊密な関係にあった背景には、民族政治の中で利用する目的もあった

と考えられる。あるインフォーマントは、彼がバタックならば誰が彼を（県知事に）選ぶだろうか、と指摘する。改革後各地で民族政治が勃興することを鑑みるならば、このような貴族の末裔の取り込みは、バタック人の血を引くと噂されるモルケス・エフェンディにとって、ムラユ人の代表として活動する上で大きな意味があったはずである。

マタン王国が復興を果たした背景には、もう1つの要因がある。モルケス・エフェンディは県知事決定により、地方政府の企業であるクタパン・マンディリを設立すると、グスティ・カンボジャを社長職へと任命する。クタパン・マンディリの社長を務めた後、グスティ・カンボジャはモルケス・エフェンディと同じゴルカル党から出馬し当選すると、1期目にして県議会議長に就任するばかりでなく、ゴルカル党西カリマンタン州支部の副長（Ketua Harian Partai Golkar）の地位まで与えられる。マタン王国の末裔の中から、グスティ・カンボジャという政治エリートが誕生したことは、マタン王国の復興において重要な意味があっただろう。そして、グスティ・カンボジャが、直系の末裔を差し置いて実質的なマタン王国の「王」として君臨しえる理由も、その政治的影響力があると考えられる。

マタン王国の復興の背後には、モルケス・エフェンディの後押しが存在し、モルケス・エフェンディの民族政治と密接に結びつくことでマタン王国も復興していくことになる。そして、そのモルケス・エフェンディと密接な関係を構築することで、グスティ・カンボジャという新たなる「王」が誕生したとも言える。



写真 4. ルマ・アダット・キアイ・マンク・ヌグリ

## 8. まとめと今後の展望

本稿では、現在継続中の調査から得られた資料を中心に、クタパン県に存在する2つの王権について概観した。調査を継続中であるため、ここでは暫定的な結論を述べるにとどめたい。

改革後、王たちが様々なアクターが介在することで復興を果たしていることを示した。改革以前まで儀礼的権威であったウル・アイ王は司教によっておこなわれた大規模儀礼の中で、大衆の面前に出てくることになる。その後は、地元メディアや NGO と結びつきつつ、存在感を増している。その一方で、「神器の柱」の増加にもみてとれるように、ウル・アイ王は儀礼的権威においても影響力が実態化しつつある。他方で、マタン王はより政治の中枢に位置することで復興を果たした。特に、県政治の大物であるモルケス・エフエンディの民族政治に利用されるかたちで復興を果たしている。これら教会の司教、NGO や地元出身の政治家などに共通する点は、改革後に新たに台頭してきたアクターであるという点である。王権の復興現象は、クタパン県内での改革後の地方政治の変動と表裏一体の関係にあるのである。王権の復興の背後には、さらに多くのアクターが存在すると考えられる。今後は、王権の復興の過程とその背後にあるアクターに関する調査を継続することによって、王権復興の政治的文脈を解明することを目的とし、調査研究を継続する。

## 参考文献

- Alfons. L. Arhoi. 2011. *Mitos dan Sejarah Raja Ulu Aik*. Sanggau.
- G. V. Klinlen. 2007. Return of Sultans: The Comunitarian Turn in Local Politics, Jamie Davidson and David Henley, (eds). *The Revival of Tradition in Indonesian Politics: The Deployment of Adat from Colonialism to Indigenism*, London & New York: Routledge, pp. 149-169.
- John, Bamba. 2002. Re-emergence of the Raja Hulu Aiq: some motives and impacts, *Borneo Research Bulletin* 33: 67-74.
- J. U. Lontaan. 1975. *Sejarah-Hukum Adat dan Adat Istiadat Kalimantan Barat*. Jakarta: Offset Bumirestu.
- P. Muli. 2008. *Sejarah Kerajaan Hulu Aik dari Dahulu Hingga Sekarang*. Ketapang.
- Stepanus Djuwng. 1999. Dayak King among Malay Sultans, *Borneo Research*

*Bulletin*. 30: 105-109.

Stepanus Djuwng, Nico Andasputra, John Bamba and Edi Petebang (eds). 2003.  
*Tradisi Lisan Dayak yang Tergusur dan Terlupakan*. Pontianak: Institute  
Dayakaologi.

## 新聞

Pontianak Post. 2011 (Feb28). Keriau Tolak Sawit.



# **Why Are Our University Public Toilets Dirty?**

## **A Case Study of Unhas Public Toilets**

Triyatni Martosenjoyo<sup>1</sup>

**Keywords:** toilet, public, university, Unhas

### **Abstract**

In architecture, the toilet is a facility that serves to contain human bodily waste. Toilets are often designed as complementary parts of a building. In Indonesia, sanitary public toilets are hard to find. The inadequate quality of the toilets is always assumed to be associated with poverty factors and low education levels. In fact, cases of unsanitary public toilets also occur amongst financially stable and educated societies. This research aims to discover how the academic society of Hasanuddin University (Unhas) interprets a sanitary public toilet.

The type of research is phenomenology based on constructive paradigm and using ethnography method. The researcher views man as part of the whole system, and this system relates to the system outside of itself. Initially, the researcher entered the realm of value interpretation for each activity of the Unhas public toilets, by finding out how they define the concepts of "public" and "cleanliness" and how these concepts are connected with public restrooms. In this study, the researcher uses the interpretation method from the perspective of Unhas society.

The data collected includes information on how public toilets have been managed since they were designed, built, used, and maintained, as well as the interconnection between the toilet with the system's components in the toilet community and its environment. Research data was obtained through direct field observation and in-depth interviews with around 120 informants. The researcher recorded all life-activities around public toilets, which were investigated through in-depth interviews with users and FGD.

---

<sup>1</sup> Doctorate Candidate of Anthropology Department Hasanuddin University



## 1. Preface

As a living being, the human has a rhythmical biological activities cycle that works continually for 24 hours, named the “Circadian Rhythm” [Campbell et al 2004:392]. The human digestion system has three cycles:

- 12.00 to 20.00 is the period for organ activity to digest.
- 20.00 to 04.00 is the absorption cycle takes place.
- 04.00 to 12.00 is the period for the excretion of metabolized waste.

The waste products resulting from human metabolism are feces, urine, and, unique to the female body, menstrual blood. Humans’ common sense moves them to create a vessel facilitating the excretion routine of feces, urine, and menstrual blood comfortably and healthily for the user that will not damage the environment, which is known as toilet.

Molenbroek et al [2011:ix] states that although we are daily confronted with toilet problems, modern society considers the toilet as a taboo subject that is not to be discussed openly. The toilet is seen in architecture and interior design in relation to colors, mirrors, and trendy accessories. Likewise, architects consider the toilet aesthetically while designing its environment. The toilet is commonly designed according to universal standards.

In Indonesia, studies on the toilet have been established plenty of times by donor organizations. Most research conducted on poor rural communities, urban slums, or lowly educated environments operates under the assumption that poverty makes toilets unreachable. In fact, the phenomenon of unclean toilets does not occur in only poor rural communities, urban slums, or lowly educated environments.

AMPL [2012] presented a survey conducted by the World Bank in 2011 on tourists for indicating the quality of toilets at airports, bus stations, and other places around the city in worse shape. Sucipto [2009] expressed that poorly maintained school toilets were the result of a lack of both maintenance efforts and students’ awareness of maintaining toilets’ cleanliness. In centers of public activities owned either privately or by the government, clean public toilets can only be accessed by making certain payments. In government offices, public toilets are locked and can only be accessed by personally approaching the relevant officials.

Unhas public toilet problems have become a sensitive issue of the leader’ succession process. The indecency of the public toilets in the Faculty of Social Politic Studies and the Faculty of Literature became headlines in the *Tribun Timur* papers dated December 19<sup>th</sup>, 2013. The papers had been comparing the luxury of public toilets owned by the rectorate with the

existing slums of the faculties' facilities [Sumardi 2013].



Figure 1. The issue of public toilet quality published in the Harian Tribun Timur December 19<sup>th</sup>, 2013.

## 2. Toilet Propaganda by the Rockefeller Foundation in Indonesia

The idea of the toilet came into Indonesia with the arrival of the Western Colonial. But the toilet as part of a preventive act for infectious diseases among societies under poverty was introduced by the Rockefeller Foundation (RF). This oil company made the toilet part of their American philanthropic campaign with the purpose to donate part of the proceeds to the poor.

In Serang, the appointed RF representatives, Heiser and Hydrick, alongside two medical directors in West Java conducted the first large-scale effort through a persuasive approach, as opposed to the authoritative approach used by the Dutch government. A sanitary campaign was carried out by *hygiene-mantri* teaching techniques for building toilets for the household. The Rockefeller Foundation Annual Report 1925 [1925:156] wrote that, in 1926, as many as 925 toilets were built voluntarily in Serang for 1,100 houses.

Hydrick had strongly opposed the construction of toilets financed by the colonial government or donors and argued that it must be done by the community itself. He had been prioritizing costs and held the basic principle that toilets should cost little, but should still be

durable, comfortable, and hygienic. The toilet room was covered with a strong bamboo frame and woven bamboo, to cover the light. It was a simple pit with a bamboo platform secured by stones and covered with a piece of wood or bamboo to prevent contamination by flies. Hydrick hoped that after residents had learned to use the toilet, they would be willing to contribute funds for better materials [Engel et al 2014:7; Stein 2009:549-550; Hydrick 1942:74].

Banyumas as a pilot project area for village hygiene of the RF in the 1930s had recently had modern indications. However, in the 2000s, 100 of the 536 households of Karang Wetan did not have a toilet, less than a third of the houses had a pipe for waste water disposal, more than 200 homes were without wells or any other sources of clean water, and 14 villages were without sanitation facilities [Stein 2009: 554]. Residents were still using open fields, fish ponds, and irrigation canals as toilets. Defecating in fish ponds was considered important for the economy, because human waste was used to feed carp, catfish, or gourami.

Such a fact shows that in after 70 years, the toilet propaganda of the RF had not changed society's pattern from excreting in any place to adopting the concept of toilets. The privileged had toilets but they were unused, and instead became objects to show off to their guests. The pattern of defecation in an open field, pond water, and town channels did not only appear in Karang Wetan. Such a pattern was prevalent throughout Indonesia. Toilets condition for hygiene purposes occurred in Banyumas was similar to happenings in various urban and rural areas throughout Indonesia [Mukherjee and Josodipuro 2000:17].

### **3. Public Toilets Meaning in Unhas**

#### **3-1. Public Toilets as Social Status Symbol**

During Unhas Tamalanrea's new campus construction in the 1980s by Rector Amiruddin, the entire campus' physical facilities were planned by an American architect using applicable Western standards, including standards for public toilets. Toilets were located at centers of accessibility on the sides of main hallways or staircases for easy access (Figure 2). No toilets were designed specifically for certain officials, except for the rector.

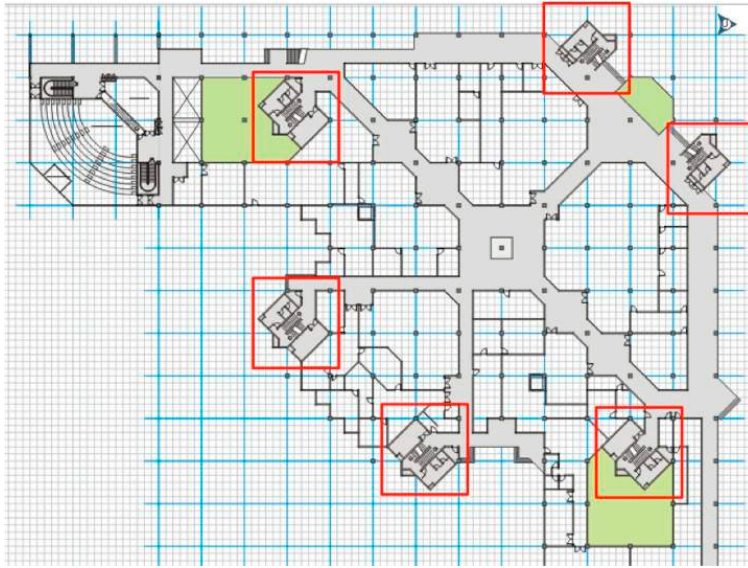


Figure 2. Public Toilets in the Central Library located in corridors or by the building's main staircases.

After Amiruddin resigned, the asset management system began was beginning to adjust to the rhythm of the campus elites. As officers, the campus elites required the privilege of private toilets and were reluctant to use public toilets that were not directly adjacent to their offices. They then built their own additional private toilets near their respective work offices (Figure 3). This situation occurred among the leadership of work units, ranging from the departmental level to the rectorate. In their opinion, the public toilet is not only meant for excretion, but is also a social status symbol. Work units with plenty of money built lavish public toilets, as things of pride to be shown off to visiting guests (Figure 4).

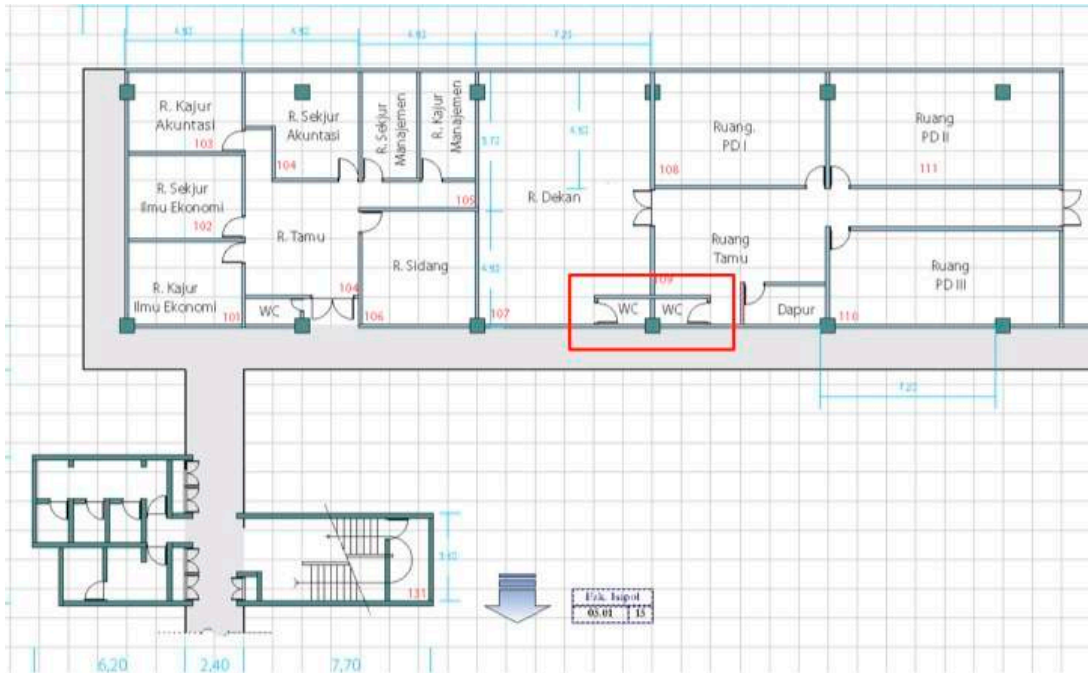


Figure 3. Elite private toilets located near work spaces.



Figure 4. Luxurious public toilet hall of rectorate.

Work units' leaders, whether academics or non-academics, who do not have the ability to build a personal toilet take efforts to make it seem that they have a toilet specifically for their own use, for example by locking parts of a public toilet and keeping the key to themselves. Lecturers who are acknowledged as non-elite people are welcome to use shared public toilets with the rest of the people. Unhas elites are unwilling to share toilets, especially with students, who they consider as filthy and unkempt. The phenomenon of locking public toilets created by work unit leaders is also followed by leaders of student organizations, *mace-mace*<sup>2</sup>, and janitors. They are sharing keys and the use of public toilets.

Patterns of the privatization of toilet use at Unhas shows us that classification regarding permits for accessing a toilet exists there. The first class consists of structural leaders, both academic and non-academic. The second class consists of employees who have close relation with to structural leaders. The third class is made up of student activists, *mace-mace*, and janitors. The fourth class is made up of ordinary lecturers and students. This classification is quite similar to the culture of hygiene associated with social class in religious communities.

Douglas provides an example by quoting Prof. Harper's summary of the rules of the religion Harvik Brahmin, that "contamination" has similarities with the religious culture of Indonesian society regarding "caste." Contact with anyone from an intermediate status will cause a person with the highest status to become impure. Contact with anyone who is not pure will make their higher status become impure.

These toilet accessibility rights patterns show that the definition of "public space" in a public toilet in Unhas is different than Arendt's definition as "appearance space" and "common world" [Arendt 1958:50-55]. In the Unhas public toilets, a process of privatization has taken place, which eventually will not allow human users to live together. Thus, the public function of public toilets as a visual space and realm is altogether lost.

The meaning of public as spatial space and open democratic space for everyone is not entirely applicable to the Unhas public toilets. Happenings and events characterizing a space as "public" make it open for everyone (as opposed to the idea of closed off and exclusive things), like when we talk about public places or public buildings [Habermas, 1991: 2]. In the public restrooms of Unhas, users do not mutually respect each other's rights. The regulation of public policy does not allow for freedom and pluralism. As Habermas, among others, has said,

---

<sup>2</sup> *Mace-mace* is a term used for women who do small scale trading inside the campus of Unhas. They are usually related to employees in the household department.



the status of a man in a public space is not at issue and its public does not act exclusively, which is not true of the public toilet.

Public space as a "place where strangers meet" and the quality of public space are determined by the presence of anonymity where the status of a person is not to be questioned. Interaction that occurs in a public space is a meeting, and not just a silent and ignorant movement through the boundaries and borders of space [Sennet 2010: 261-272]. When the Unhas public toilets can only be accessed by people who know each other, then the public toilet is no longer a public toilet, but becomes a private toilet. Anonymity does not exist because a public toilet can only be accessed by a limited group of people, known as Unhas elites.

Users' class division has been clearly affecting public toilet hygiene management. Janitors will clean a toilet based on the class of its user. Toilets used by campus elites will be cleaned on a regular basis, while the ones used by students and regular lecturers will be cleaned perfunctorily. The quality of cleanliness of public toilets used by students and ordinary lecturers is not within the management controls because they have never been to these toilets.

### **3-2. Public Toilets Management**

Public toilets are designed, constructed, financed, operated, and maintained following the existing system in the organizational structure of Unhas. Estate planning becomes the responsibility of the Bureau of Planning, the procurement of assets is done by the Equipment Department, financing by the Finance Bureau, and the asset operation and maintenance by the Household Department. The Unhas organization system was designed with the Theory of Structural Functionalism approach developed by Emile Durkheim in 1987, which sees society as a biological organism, where in order to survive, the organs within these organisms have mutual dependency [Barnard 2004:63:64].

As every function of modern organizations depends on its determined structural parts, Unhas society will work together inside an organic solidarity, with members carrying out their main responsibilities and their own functions for one organization aims together. Unhas leaders, whose part in the main structure determines their goals, and other parts with different functions in the structure will synergize to achieve those goals.

In fact, the ideal function of Unhas' organizational structure is not running well, because on the outer side of the formal organizational structure system, Unhas societies have



established a non-formal organizational structure system, which determines the position of a staff member inside the organizational structure. The recruitment system, promotion, and leadership succession process is determined by the presence of: (1) kinship relations involving family networks; (2) the patron-client relationship network, *ajjoareng-joa* or *karaeng-joa*; and (3) competence.

This kind of organizational culture has driven employees of Unhas to bear responsibility for not only structural leaders in the formal organization, but also for relatives or patrons to whom they are indebted for their promotion, while also carrying out their daily responsibilities. It is quite often found that, while carrying out his responsibilities, an employee will put his relative or his patron in a higher position than himself inside the formal organization structural (Figure 5).

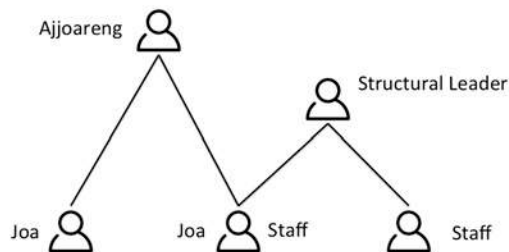


Figure 5. Patron-client relationship patterns vs. formal structural leader-staff relationships.

In Bugis-Makassar societies, an *ajjoareng* has access to central of authority and wealth, which will be distributed to his *joa*. As long as the *ajjoareng* meets his end of the deal and protect their needs, the *joas* will stay faithful. If not, they will leave their *ajjoareng*. On the same note, if a *joa* is no longer seen as faithful, an *ajjoareng* will cut his ties with him [Pelras 2006:203-207]. The larger a network of kinship relations and patron-client relations, the wider area of power that should be shared. The result of this problem is that the function of the structure is not capable of running in an ideal condition, and even if there is competition among leaders, parts of the structure can still weaken each other. In management, there is no certainty of who does what, who is responsible to whom, and who would soon get what.

### 3-3. Public Toilets Function as Sanitary Facility

Public toilet facilities were planned by the architect as defecation facilities, for urination, and as powder rooms for Unhas people and visiting guests. During their development, centers of public toilets were then equipped with ablution facilities needed by the majority of Muslim users. Currently, in addition to the functions mentioned above, almost all public toilets also facilitate other needs of users that are not related to the intended functions. These functions are as: (1) facilities to wash cookware, dining, and drinking equipment; (2) warehouses; (3) housing for individuals; and (4) offices.

Washing cookware and dining ware has been done in the public toilets because the Unhas campus was not planned and equipped with a kitchen facility. The architect assumed that all dining and drinking activities would happen in canteens. For an occasional drink in an office space, there would be a water dispenser and paper cups. While in fact, Unhas society has the custom of eating inside the work space, even while holding a feast for guests. The lack of a kitchenette has caused washing activities to be carried out in public toilets instead (Figure 6).

Toilets that were not under Unhas management control became a master-less area, which was later acquired by campus residents, student activists, and/or *mace-mace*, who turned the space into storage rooms or living facilities (Figure 7 & 8). The public toilet functions as an office space for the cleaning service company PT. Dinar Mutiara Sakti (Figure 9 & 10).



Figure 6. Public toilet as a storage room.



Figure 7. Wash basin used as a washing space for used dining ware



Figure 8. A public toilets center serves as an office for a cleaning service company (a).



Figure 9. Washing machine for the laundry of students who spend the night inside the campus, located in public toilet halls.



Figure 10. A public toilets center serves as an office for a cleaning service company (b).

Public toilet functions other than to dispose of bodily waste shows how different the definition of clean for Unhas society is from that of Western society. For Western society, cleanness is associated with germ-free conditions. Douglas [2001: 33-36] states that we know the definition of daily cleanliness to be a condition free of dirt, whereas ideas of clean or dirty are relative. For Western culture, to avoid dirt is a matter of hygiene or aesthetics, where the idea of dirt is dominated by knowledge of disease organisms. For ancient religious cultures,

the idea of dirt is connected with the symbols of "purity" and "spirit." The evolution and definition relativity of what is defined as clean or dirty are also becoming influenced by the development of the views towards health culture and religion. The health community's ideas of the definition of cleanness are associated with disease, while the idea of religious communities were formed around the purpose of purifying rituals and the purification of anything considered contaminated.

For Western communities, localizing factors that cause germs are meant to prevent the germs from spreading to areas that need constant cleanness. Making public toilets washing spaces for cooking ware, dining ware, and drinking ware does not symbolically mean clean from filthy in that area, but expresses the meaning of water. For Eastern spiritualism, water is the symbol of purification. Someone could be purified from filth by bathing in the Ganga River, even though it has been named as one of the eight most contaminated rivers in the world [Bittner 2013]. All body cleansing activities, as well as washing cooking, dining, and drinking wares has always been done in places where there is water, including toilets. Unhas public toilets have not been considered as unsanitary places, and every activity is deemed proper inside these public toilets. There was no sensation of disgust encouraging people to be clean. Therefore felt disgusted at the filth, living beings will attempt to clean [Curtis and Biran 2001:18; Curtis 2007:661, and Barnes 2006: 229-259].

#### **4. Conclusion**

The result of this research has shown how the perception of the toilet for Indonesians is relative, and influenced by local culture. Society understands how important the function of the toilet is as a localization vessel for sources of contamination, but people do not give the toilet its proper sanitary priority in their daily activities.

Problems with the quality of Unhas public toilets are not simply about interior or aesthetic issues, but are closely associated with many things, ranging from social status symbol, organizational culture system, asset management, public space meaning, and a series of activities of the campus society.

The Unhas public toilets are not seen as dirty places with germs as potential contamination sources, because in the toilet water is available for cleansing anything dirty. The existence of water in the toilet will turn dirtied cooking, dining, and drinking wares into clean ones.

## References

- Anonymous. 1925. The Rockefeller Foundation, Annual Report 1925. New York. The Rockefeller Foundation.
- Anonymous. 2012. Ini Persepsi Wisatawan Asing Soal Sanitasi di Indonesia. Kelompok Kerja Air Minum dan Penyehatan Lingkungan Nasional January 11<sup>st</sup>, 2012. Website Pokja AMPL.  
[http://sanitasi.or.id/index.php?option=com\\_content&view=article&id=862:ini-kata-wisatawan-asing-soal-sanitasi-di-indonesia&catid=55:berita&Itemid=125](http://sanitasi.or.id/index.php?option=com_content&view=article&id=862:ini-kata-wisatawan-asing-soal-sanitasi-di-indonesia&catid=55:berita&Itemid=125).  
Accessed January 19<sup>th</sup>, 2011.
- Arendt, Hannah. 1958. The Human Condition. Chicago. University of Chicago Press.
- Barnard, Alan. 2004. History And Theory In Anthropology. Cambridge. Cambridge University Press.
- Barnes, David S. 2006. The Great Stink of Paris and The Nineteenth Century Struggle Against Filth and Germs. Baltimore, Maryland Johns Hopkins University Press.
- Bittner, Michael. 2013. The World's Most Polluted Rivers. Website EHS Journal – Practical Solutions For Environmental, Health, and Safety Professionals, July 4<sup>th</sup>, 2013.  
<http://ehsjournal.org/http://ehsjournal.org/michael-bittner/the-worlds-most-polluted-rivers/2013/>. Accessed December 18<sup>th</sup>, 2013.
- Campbell, Neil A; Reece, Jane B; & Mitchell, Lawrence G. 2003. Biologi Jilid II. Jakarta. Penerbit Erlangga.
- Curtis, Valerie. 2007. Dirt, Disgust, and Disease: A Natural History Of Hygiene. Journal of Epidemiol Community Health No. 61 2007 pp. 660–664. London. BMJ Group.
- Curtis, Valerie & Biran, Adam. 2001. Dirt, Disgust, and Disease - Is Hygiene In Our Genes? Journal of Perspectives in Biology and Medicine, Volume 44 No. 1 Winter 2001 pp. 17–31. Baltimore, Maryland. The Johns Hopkins University Press.
- Douglas, Mary. 2001. Purity And Danger, An Analysis of The Concepts of Pollution And Taboo. New York. Taylor & Francis, Routledge.
- Engel, Susan and Susilo, Anggun. 2014. Shaming and Sanitation in Indonesia – A Return to Colonial Public Health Practices? Journal of Development & Change 45 (1) pp. 157-178. Netherlands. Institute of Social Studies-Blackwell Publishing.
- Habermas, Jürgen. 1991. The Structural Transformation of The Public Space, An Inquiry Into A Category of Bourgeois Society. Cambridge. MIT Press.
- Hydrick, J.L. 1942. Intensive Rural Hygiene Work in the Netherlands East Indies. Netherlands and Netherlands East Indies Councils, Institute of Pacific Relations.
- Molenbroek, Johan F.M; Mantas, John, & De Bruin, Renate. 2011. A Friendly Rest Room:

Developing Toilets of The Future For Disabled And Elderly People. Amsterdam. IOS Press.

Mukherjee, Nilanjana dan Josodipoero, Ratna I. 2000. Is it Selling□No Toilets? A Lifestyle - Learning from Communities with Sanitation Success Stories in Indonesia. Water and Sanitation Program East Asia and Pasific.

Pelras, Christian. 2006. Manusia Bugis. Jakarta. Nalar-Forum Jakarta Paris.

Sennett, R. 2010. The Public Realm. In Gary Bridge & Sophie Watson (Eds) pp. 261-272. London. Blackwell Publishers.

Stein, Eric A. 2009. Sanitary Makeshifts and the Perpetuation of Health Stratification in Indonesia. In Hahn, Robert A dan Inhorn, Marcie C (Eds). Bridging Differences In Culture And Society pp. 541-565. New York. Oxford University Press, Inc.

Sucipto. 21 Juli 2009. Budaya Menyiram WC Masih Rendah. Website Kompas.com <http://nasional.kompas.com/read/2009/07/21/22161965/budaya.menyiram.wc.masih.rendah>. Accessed January 5<sup>th</sup>, 2012.

Sumardi, Edi. 2013. WC Unhas Kotor, Ini Tanggapan Wali Kota Baru dan Lama Makassar. Website Tribun Timur December 19<sup>th</sup>, 2013. <http://makassar.tribunnews.com/2013/12/19/soal-wc-unhas-ini-tanggapan-wali-kota-baru-dan-lama-makassar>. Accessed Januari 14<sup>th</sup>, 2014.



# **THE IMPACT OF A POLLUTED MARINE ENVIRONMENT ON THE SOCIO-ECONOMIC CONDITIONS OF FISHERS-IN BATAM CITY**

Wahyudin<sup>1</sup>, Aris Baso<sup>2</sup>, Sutinah Made<sup>3</sup>

**Keywords:** marine environment pollution, fisheries productivity

## **Abstract**

Coastal and marine environmental conditions greatly affect the condition of area resources, specially fish. ultimately affecting also the welfare of the fishers. This study aimed to examine the factors that have caused a decline in the quality of the marine waters around Batam city and to analyze the value of the fishery production changes in Batam. The research location was Batam city, specifically with a 3 village sample: Tanjung Riau, Tanjung Uma, and Pulau Abang villages. Field data was retrieved for 3 months, from January through March 2014, with a questionnaire used as a data collection tool. the results showed that a decline has occurred in the quality of the coastal and marine environmental in Batam city to a score of  $> -30$ , using the, value system from the US-EPA (Environmental Protection Agency), and placing it in class D. The value of dissolved oxygen, ammonia, and metals (Pb, Cu, Cd, Cr) exceeds that allowed for good quality sea water in accordance with the standards from the Minister of Environmental No. 51 of 2004. In terms of the physical properties of the water, the brightness and turbidity parameter does not meet the water quality standards, these conditions being caused by high activity from construction and mangrove conversion. These situations have implications regarding the decline in fishery productivity in Tanjung Riau and Tanjung Uma villages. The average economic loss from production is between IDR 685,209,298 and IDR 771,588,715/year. The pollutant levels in Batam city to continue to increase with activities in the coastal areas, negatively affecting the fishers in Batam city.

---

<sup>1</sup> Graduate Student of Fishery Science, Postgraduate Hasanuddin University

<sup>2</sup> Lecturer in Marine Science and Fishery Faculty Hasanuddin University

<sup>3</sup> Lecturer in Marine Science and Fishery Faculty Hasanuddin University

## Introduction

Coastal and marine environment damage leads to the decline of the existing environmental resources. Damage to oceans and coastal resources manifests itself in a decrease in the flow of services from these resources for activities and human welfare. Therefore, for the purposes of policy and good management, as well as ownership and authority status, the oceans and coastal resources should be clear, and a resources price or value should be calculated for the damage. For this valuation, it is useful to regard one unit of benefit or physical damage as one Indonesian Rupiah (IDR). Economic assessment has been used in attempts to solve the problems of coastal areas, by means of an impact analysis in order to measure the damage caused by activity in the coastal systems, particularly in the form of environmental impact [Kusumastanto 2000].

According to Nugraha's [2008] research, into coastal areas in the Riau Archipelago province, the vast mangrove ecosystem there is 26502.26 ha, or 6.49% of Indonesia's mangrove forest area, generating an estimated economic value of IDR 47,304,015.02/ha/year. The coral reefs in this archipelagic region cover 23,200.14 ha, generating an estimated economic value of IDR 279,424,267.70/ha/year, and the economic value of the seagrass ecosystems is estimated at IDR 66,229,789.90/ha/year. The total economic value of coastal resources Riau Islands Province is estimated at IDR 392,985,070.6/ha/year. Thus, where the rate of destruction of ecosystems has reached 40% of the total existing coastal and marine environments, the estimated loss so far is IDR 3,481,865,862,000, in damage to coastal and marine environments as a result of sea sand mining in the Riau Islands province. The decline in the quality of coastal and marine ecosystems has certainly precipitated the decline in caught fish.

In 2012, the economic growth of Batam city was 7.85% higher than the average national economic growth, making this region a mainstay as a driver of national economic growth as well as in the Riau Archipelago Province [BP Batam 2013]. Various sectors of these economic drivers include communications, electricity, water, and gas; the banking, and industrial sectors and shipping yard. The trade and services sectors are the economic pulse of Batam city, as they are not only for the public consumption of Batam and the rest of Indonesia but also an export commodity for other countries. The economic activity in the city also exists in order to increase employment and social welfare.

The rapid growth of industry in Batam, in addition to increasing the pace of development, has also created its own pressures on the aquatic environment, especially in coastal areas and mangrove forests. Result from Dasminto's [2007] research, regarding coastal environmental management as it pertains to industrial development in the city of Batam, illustrate that the general condition of the coastal waters of Batam is very poor, characterized by poor sea water quality and a threat to the existence of coastal ecosystems and fisheries resources. Coastal dumping and the mangrove forests have resulted in the disruption of the surrounding aquatic ecosystems, such as increased water turbidity, siltation, and resulting destruction of the estuary area.

Given the situation, this study aimed to analyze the factors that have caused the decline in the quality of coastal and marine environments, as well as the changes in the productivity of fisheries in the city of Batam.

## Materials and Methods

### Location Research

This study was conducted from January to March 2014 in the city of Batam, in three sample locations : the villages of Tanjung Riau, Tanjung Uma, and Abang Island.

### Tools and Materials

The tools and materials used in this study are as follows a questionnaire as the medium for gathering information; a motor boat used for transport in the field; a GPS (Global Positioning System) to position the fishing grounds;

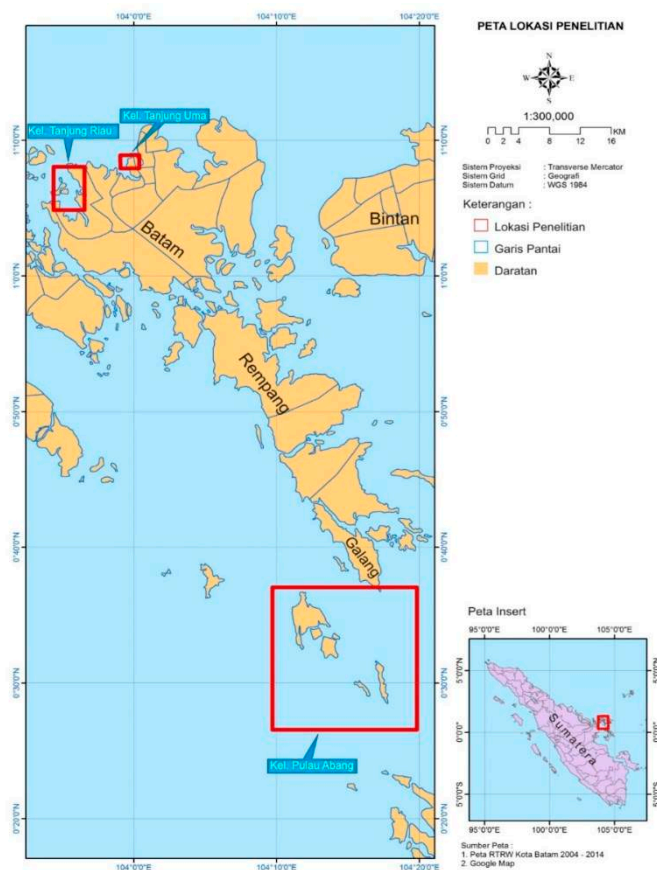


Fig 1. Map of location research

and stationery for recording data in the field.

### **Population and Sample**

The population in this study was number of fishers, along with the surrounding community that is both directly and indirectly related to the use of coastal and marine resources. A simple cluster random sampling technique [Rianse et al. 2008] –that is, grouping samples according to the type of activity with regard to coastal and marine resources –was used to determine the sample for this study. Ultimately, the total –sample consisted of 58 fishers, one staff member from Bappedal Batam city, and 2 staff members from KP2K Batam city.

### **Data Collection**

Data collection techniques for this study include in – depth interviews with the respondents, a field survey, and literature relating to the topic. The primary data was gathered in relation to the general condition of the site, such as social and cultural characteristics, changes in the production quantities of the catch, and changes in the location of arrests and fishing technology. Secondary data was obtained from government agencies and research results relating to the value of the water quality of the marine waters in Batam city.

### **Data Analysis**

The initial step in assessing the environmental degradation of the coastal and marine environment in Batam was to identify the level of contamination that occurred. Levels of water pollution were determined by comparing current water quality data to the marine water quality standards for marine life. These were established by the Decree of the Minister of Environment No. 51 of 2004 and the Decree of the Minister of Environment No. 115 of 2003, which presented guidelines for determining the status of water quality, according to the STORET parameters. In principle, the method is to compare between STORET water quality data and water quality standards at certain destinations to determine the status of water quality standards. then, water quality can be determined using the value system of the US-EPA (Environmental Protection Agency). This approach examines changes in the production, or output, as a basis for assessing coral reef ecosystems. This

technique is generally applied to fisheries to estimate the production difference before and after the impact of an activity that has caused changes to the coastal and marine ecosystems [Fauzi 2005].

## The Results

The water quality conditions in the city of Batam, especially the physical parameters, does not meet the quality standard for marine life as the total score is -18. If one uses the US-EPA assessment system, the water in Batam falls into class C, which means that the water is polluted.

Tabel 1. Tabulation of scoring assessment based on water quality data in the coastal waters of Batam city, 2013

No.	Parameter	unit	Standar	Average	Value Max.	Min.	Average	Score Max.	Min.	Total
<i>Physics</i>										
1	Brightness	Meter	>5	1.83	2.32	1.5	-6	-2	-2	-10
2	Temperature	(°C)	Natural	29.44	31.05	27.58	0	0	0	0
3	DHL	(µs/cm)		53.86	56.3	51	0	0	0	0
4	Turbidity	NTU	<5	5.63	13.4	0.06	-6	-2	0	-8
5	Salinity		Natural	3.47	3.65	3.1	0	0	0	0
<i>Chemistry</i>										
pH			7-8.5	7.98	8.16	7.78	0	0	0	0
DO	Mg/L		>5	8.98	12.9	6.17	0	0	0	0
<b>Total</b>										<b>-18</b>

Source: Secondary data when analyzed [2014]

Tabel 2. Tabulation of scoring assessment based on water quality data in the coastal waters of Batam city, 2012

No.	Parameter	Unit	Standard	Average	Value Max.	Min.	Average	Score Max.	Min.	Total
<i>Physics</i>										
1	Brightness	Meter	>5	2.33	3.88	0.5	-6	-2	-2	-10
2	Temperature	(OC)	Alami	27.22	33	23.2	0	0	-2	-2
3	TSS	mg/l	20	2.4	6	1	0	0	0	0
<i>Chemistry</i>										
4	pH		7 - 8.5	5.79	9.3	3.5	-12	-4	0	-16
5	Salinity	(‰)	33-34	29.87	33	27	-12	0	-4	-16
6	DO	mg/l	>5	3.99	13.28	0.85	-12	0	-4	-16
7	BOD5	mg/l	<20	7.35	9.26	4.23	0	0	0	0

8	COD	mg/l		75.23	91	29.8	0	0	0	0
9	NO3	mg/l	0.008	0.0124	0.0354	0.0002	-12	-4	0	8
10	NO2	mg/l		0.05	0.16	0.01	0	0	0	0
11	NH3	mg/l	0.3	0.55	1.14	0.25	-12	-4	0	-16
12	PO4	mg/l	0.015	0.333	0.42	0.14	-12	-4	0	-16
13	H2S	mg/l	0.01	6.335	8.28	0.4	-12	-4	-4	-20
14	Pb	mg/l	0.008	0.058	0.08	0.04	-12	-4	-4	-20
15	Cu	mg/l	0.008	0.963	1.24	0.66	-12	-4	-4	-20
16	Cr	mg/l	0.005	0.793	1.09	0.55	-12	-4	-4	-20
17	Cd	mg/l	0.001	0.714	0.9	0.47	-12	-4	-4	-20
<b>TOTAL VALUE</b>										<b>-184</b>

Source: Secondary data when analyzed [2014].

The result of measuring pollution in the water samples from Batam city in 2012, reveal that the water chemistry parameters did not meet the quality standard for marine life, as shown in Table 2, where here the total score is -184. The US-EPA, system shows that the water in the city of Batam falls into class D, which signifies heavily polluted water.

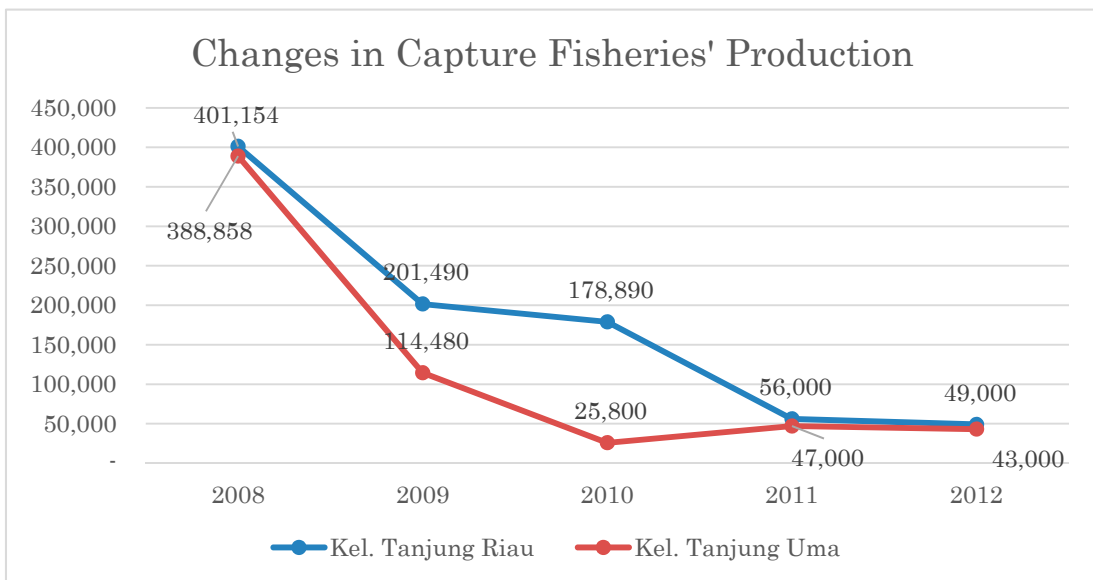


Fig 2. The change in capture fisheries production in Tanjung Uma and Tanjung Riau villages

Figure shows a decrease in capture fisheries production in Tanjung Uma over the last 5 years. However, in 2010, production increased to 258 tons. Unfortunately, this level



was not maintained, thus, in 2011 the decline was again very steep, down to 47 tons. In 2012, there was a decrease of 4 tons. Meanwhile, a decline in fishery production in the village of Tanjung Riau was very significant in 2011 to 56 tons, which in the previous year had been 178.89 tons. Then, there was a 7 ton decrease in the fish catch in 2012. The image data can be caused to calculate value 2. Furthermore, other productivity changes as a result of the decline in production from fishing. The production approach provided just one indicator of the losses suffered by the community from the impact of development activities

As illustrated in Figure 3, the economic value of the production lost in Tanjung Riau ranges from IDR 126 million to 1.966 Billion, within a period of five years. The economic value has reached 3.426 billion, which is a loss, average, of 685 million per year.

## **Discussion**

This study shows that the water in the city of Batam is classified into class D, which indicates it is heavily polluted by US-EPA standards. These results agree with those from a study done by Dasmianto [2007], which states that in the entire region inshore and the sea at Batam city, the water is mostly heavily polluted. It appears that pollutants from industrial waste disposal and other activities have been distributed horizontally to different areas of the coastal waters around Batam. This pollution is allegedly because of the influence of ocean currents that move water various directions according to the season there. Furthermore, Dasmianto [2007], explained that the coastal waters of Batam are visibly polluted by metal. Some of the metals exceeding the quality standard include Cu, Cd, Cr, Pb, Ni and Zn. Even entire regions inshore or at sea in the Batam area have been contaminated by Zn, Cu and Pb, while most areas around Batam city have polluted coastal waters

Any reclamation in Batam will affect the change and displacement of previously deposited sediments in the reclamation area. Dredging and backfilling by way of reclamation in Batam can cause changes in the flow pattern around it, which in turn will change the pattern of sedimentation. The sedimentation rate is associated with a high value of TSS in a body of water. High suspended solids block light penetration into the water bodies. Research results from Irham [2009] show that the rate of sedimentation in the Abang Island waters is 5.89 - 11.32 mg/cm<sup>2</sup>/sec. With reference to the expected impact of sedimentation on coral communities, Khordi [2010] believes that the sedimentation rate is at a moderately dangerous impact level where the impact will cause a decreased rejuvenation

proficiency level and will reduce the number of species. Meanwhile, according to Iqbal et al. [2013], sedimentation has two main impacts on coral reef ecosystems. First, it lowers the brightness level, which is an absolute requirement for the growth of coral. Second, the sediment particles cover the coral polyps, training the coral as it attempts to rid itself of sediment. If this situation lasts long enough, the coral animals will die.

Reclamation in Batam will affect the potential loss of biological resources, especially marine life that has been used by fishes as a source of livelihood, and the subsequent impact is a decrease in the revenues of fishers. In general, any attempt at reclamation in Batam will greatly affect the existence of coastal ecosystems such as mangroves, seagrass beds, and coral reefs. The ecosystem is the lifeblood for marine life as a place for spawning, feeding, and enlargement.

The city administration currently consists of 400 large and small island where the majority of the population earns a coastal livelihood at fishing. This greatly affects the pattern of settlement in the region as a place to stay. Most of the fisher population have built their residences above the sea, living in the tidal zone. People living in this residential tidal zone produce a great deal of domestic waste from all household activities, such as washing and cooking, throwing trash directly into the sea. Household activity produces both solid waste, like garbage, and liquid waste, such as detergents, food, and human feces. The interviews revealed that no wastewater management has been installed for the housing in Batam city. Thus, household waste will continue to flow from the residential sewers to the city sewer, leading to the mouth of the river and ending at the sea without further management. The large amount of domestic waste in Batam city can be discerned from testing the quality of the water in Batam. Domestic waste, such as ammonia, phosphates, and BOD5, will cause changes in some physical and chemical parameters.

The data shown in fig. 2 can be used to calculate the value of the productivity changes that occur as a result of the decreasing production from fishers. Production is one indicator of the losses suffered by the community as a result of the impact of development activity.

As illustrated in Figure 3, the economic value of the production lost in Tanjung Riau village ranges from IDR 126 million to 1.966 billion over a period of five years; the economic value reached 3.426 billion, which is, on average, a loss of 685 million per year.

This value reflects the economic loss owing to environmental degradation that occurs in the area, which causes production from household fishers to be much lower than it should be.



Fig 3. The value of economic losses from side productivity in Tanjung Riau village

The additional value of production is much smaller, so that each year production value declines further. In 2011, the loss was 3.3 billion; thus, over 5 years, the value of lost production reached 3.857 billion, the average being 771 million annually.

### Conclusions and Suggestions

The results of this study showed that the water in Batam city can be classified as heavily polluted, a condition caused by the high activity from construction and the conversion of mangrove forests. Pollution of marine waters does not directly affect the fisheries production in the city of Batam. Based on the results of research and field studies, Batam has a large amount of industry. Shipping yards, trade, and tourism are expected to be the main resource users in Batam city, specially as the environmental aspects of coastal and marine ecosystems accelerate sustainable development in the city of Batam. Therefore, the research from this study needs to be applied to a wider area.

## Thank You Note

The author thanks the Faculty of Marine Sciences and Fisheries at Hasanuddin University, who have been willing to give advice and constructive criticism, as well as friends who are postgraduate students in fisheries science department. Thanks also to the Government of Riau Islands Province, which has provided the opportunity, through scholarship partnerships, for continuing study in the master's program.

## References

- BP Batam. 2013. *Ekonomi*. Accessed on December 27<sup>th</sup>2013. Available from: <http://www.bpBatam.go.id>
- Dasminto. 2007. *Pengelolaan Lingkungan Pesisir di Kawasan Pengembangan Industri Kota Batam, Provinsi Kepulauan Riau*. Tesis IPB. Bogor.
- Fauzi, A. 2005. *Kebijakan Perikanan dan Kelautan “isu, Sintesis, dan Gagasan”*. PT. Gramedia Pustaka Utama. Jakarta.
- Iqbal, A.B., Natsir, N., & Andi Niartisingih. 2013. *Membangun Sumber Daya Kelautan Indonesia*. IPB Press. Bogor.
- Irham, W. 2009. *The Correlation between Coral Reef and Seagrass with Rabbit Fish (Siganus canaliculatus) Resources in Abang Island, Batam City*. Tesis IPB. Bogor.
- Keputusan Menteri Lingkungan Hidup No. 51 tahun 2004 Tentang Pedoman Penentuan Status Mutu Air, Lampiran I. Jakarta.
- Keputusan Menteri Lingkungan Hidup No. 115 tahun 2003 Tentang Standar Baku Mutu Air Laut untuk Budidaya, Wisata Bahari, dan Biota Laut. Lampiran I, II, dan III. Jakarta.
- Kordi, MGK. 2010. *Ekosistem Terumbu Karang*. PT. Rineka Cipta. Jakarta.
- Kusumastanto, T. 2010. *Valuasi Ekonomi Sumberdaya Wilayah Pesisir dan Lautan*. Prosiding Pelatihan untuk Pelatih, Pengelolaan Pesisir Terpadu. Pusat Kajian Sumberdaya Pesisir dan Lautan FPIK – IPB. Bogor.
- Nugraha, H.D. 2008. *Menghitung Nilai Kerusakan Lingkungan Pesisir dan laut Akibat Penambangan Pasir laut di Kepulauan Riau*. Accessed on January 17<sup>th</sup>2012. Available from: <http://haris-djoko.blogspot.com>
- Rianse, U., & Abdi. 2008. *Metode Penelitian Sosial dan Ekonomi*. Alfabeta. Bandung.

# 土地相続にみる農家の取組み

## －メコンデルタ農村の事例研究－

福島直樹<sup>1</sup>

### **Local Practices of Farm-land Inheritance: A Case Study of Rural Areas in the Mekong Delta**

**Keywords:** メコンデルタ、ベトナム、農村、土地相続、男女均分

#### **Abstract:**

Land inheritance has played a special role for rural farmers in forming a network between relatives. However, in recent years, labor demand in the household has changed due to the mechanization of agriculture in rural areas. The values of farming and land have also changed. Therefore, it became difficult to keep relatives in rural area by the distribution of agricultural land.

We investigated the change that rural areas experienced in the Mekong Delta region of Vietnam. In the Mekong Delta region, the traditional practice for farmland inheritance is called “Sons-Daughters Equity”. We observed a new situation where inheritance methods were diversified, however. Some households inherited only to sons while intentionally excluding daughters. Other households had unequal distribution among heirs, and still other households gave preferential treatment to the youngest son. Their farmlands were maintained by doing so. We pointed out, for example, some households that recognized equity among new households, not among sons and daughters. There are additional farmlands of his wife or of her husband in the new household. In the case where the householder is a woman, it can have an impact on land inheritance. There is also a possibility that an ancestor’s tomb will affect the land inheritance.

---

<sup>1</sup> Naoki FUKUSHIMA 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程 グローバル地域研究専攻 持続型生存基盤論講座

In the Mekong Delta region, farmers practiced the most appropriate way to alienate land according to certain conditions. Land inheritance still had to achieve the objective of maintaining and to expanding relatives.

## 1. はじめに

農家が農村で親族間のネットワークを形成するために、土地の相続が一定の役割を果たしてきたと考えられる。しかし農業の機械化により世帯内の労働力需要に変化が起きたばかりでなく、営農や土地それ自体の価値にも変化が生じ、農地の分配によって親族を農村に引き留めておくことが困難になりつつあるようだ。農村が経験している近年の変動について、ベトナムで実態を調査した。本稿は、アジア農村研究会第22回調査実習（写真 1.）の成果に基づいて書かれたものである（付記参照）。



写真 1. ティエンザン大学の先生方とアジア農村研究会メンバー（提供：Pham Quoc Thinh）

メコンデルタ地域では、農地の男女均分という相続慣行がおこなわれてきたといわれている。藤倉は、相続による農地の分割が営農規模の縮小や土地不足を引き起こし、男女均分を維持することが難しくなっているだろうと指摘している [藤倉 2014: 29]。

農家が土地を保有する際に、行政が発行する土地証書の権威を利用しているという点では、現在も変わるところはない。しかし農家の相続事例を個別にみると、男女均分に限らず、さまざまな相続方法が採られていることがわかった。たとえば、息子のみに相続する世帯のなかには、そもそも娘がいないために息子にのみ相続する世帯と、娘がいるにもかかわらず意図的に娘を除外する世帯とがある。また息子に均分相続する世帯と、息子間に差をつけて相続する世帯とがある。本調査に基づく分析から、末息子を優遇すること



で農地を維持管理しようとする農家が増えているという傾向が示唆された。さらに、均分相続の均分の認識が世帯によって異なる可能性があることや、戸主が女性であるがゆえに土地の相続形態に独自の影響を与えている可能性があること、さらに祖先の墓標の位置が土地相続に影響を与えている可能性があることがわかった。本調査に基づいて書かれた関連する論考についても、参照されたい [宇戸、富塚、藤倉、柳澤 2014]。宇戸は農地面積の多寡や烈士認定に着目して土地相続との関係を考察している。また富塚は先行研究にみられるカンハウ（Khanh Hau）村の事例と対比しつつ、主に政治体制の変動期である 1975 年前後 10 数年間における農家の土地保有状況について考察している。

農家はそのときどきに与えられた条件に従って最良と考える土地相続をおこなってきただろう。農地の分割には限度があると考えられるが、土地相続は親族のあいだをとりもつための一つ的手段として、メコンデルタ農村の現状においてなお一定の効力を有しているといえる。

## 2. 調査方法

ベトナム南部のティエンザン（Tien Giang）省チョガオ（Cho Gao）県タンビンタン（Tan Binh Thanh）村を調査地に選定した。本調査は、アジア農村研究会第 22 回調査実習として計画され、ベトナム国立ティエンザン大学と三菱 UFJ 国際財団の協力を得て実施された。本研究会は、地域の実情を理解し、また地域が直面する諸課題について、適用可能かつ適切な解決手段を見出すための調査手法を学ぶ学生主体の集まりである。タンビンタン村の世帯数は合計で 2,073 世帯あり、5%の土地なし農民が存在するとされる（表 1.）。インタビュー調査は、A 集落と B 集落について、土地を所有する農家のなかから調査に応じた 53 軒の各家庭を戸別に訪問しておこなった（写真 2.）。本インタビュー調査は、無作為抽出によるものではない。

筆者は 53 軒のインタビュー記録のなかから、39 軒の事例について分析した。残りの 14 軒の事例については、土地相続の



写真 2. インタビュー風景（撮影：富塚あや子）



動向を知る上で必要なデータを一部欠いている等の理由により分析対象から除外した。本調査は、2014年8月30日から9月13日におこなわれた。

表 1. タンビントン村の集落別世帯数と作付面積

		世帯数(H)	作付面積(F)			1世帯当たり作付面積(F/H)
			コメ (ha)	畑作 (ha)	果樹 (ha)	
タンビントン村 (全体)		2073	619	21.6	102	0.36ha
(内訳)	A集落	419	159	2.9	21	0.44ha
	B集落	742	180	6.3	27	0.29ha
	C集落	412	132	7	28	0.41ha
	D集落	500	148	5.4	26	0.36ha

引用：[藤倉 2014: 29]

### 3. 調査結果

メコンデルタ農村（写真 3. 写真 4. 写真 5.）に位置するタンビントン村の土地相続には、さまざまな形態がみられた。39 軒の事例を分類し、一般的な傾向を探った。世帯記号として、たとえば 0908SNT02（1937 生）では、インタビューした日付とインタビューを担当した班とインタビューした家の順番を組み合わせた記号を用いた。相続タイプの概要は次のとおりである。



写真 3. メコンデルタ農村の田園風景（筆者撮影）



写真 4. タンビントン村の果樹園（ドラゴンフルーツ）（撮影：富塚あや子）



写真 5. 市場に並ぶドラゴンフルーツ（筆者撮影）

#### タイプ 0:

息子のみ相続、かつ一人っ子のケース。そもそも土地分配が均分か否かについて相続者のあいだで考慮する必要がなかったケース（タイプ 2 とタイプ 5 に類似）。

事例: 0908SNT02（1937 生）：一人っ子だったために単独相続した

0908TSW02（1960 生）：インフォーマント（情報提供者）以外すべて死去。残されたインフォーマントが単独相続した

#### タイプ 1:

息子のみ相続、かつ娘が意図的に除外されたケース。しかし息子間では土地分配が均分か否かをそもそも考慮する必要がなかったケース。

事例: 0906FKS02（1937 生）：子供 2 人（息子 1 人と娘 1 人）。息子がすべての土地を相続した

0908FKS01（1964 生）：子供 3 人（息子 1 人と娘 2 人）。息子がすべての土地を相続した

0903FKS02（1966 生）：子供複数人（息子が 2 人と娘数人）。父親が住職。長男は寺男となり土地を相続しなかったため、次男がすべての土地を相続した。息子間で土地分配が均分か否かをそもそも考慮する必要がなかったケースであり、今回の調査で特徴的な相続タイプである「末息子最大」と区別した

タイプ 2:

息子のみ相続、かつ世帯内に娘がいなかったケース。意図的に娘が除外されたわけではないケース（タイプ 0 とタイプ 5 に類似）。

事例: 0909TSW01（1961 生）：娘がおらず、息子たちで均分相続した  
0909FKS02（1962 生）：娘がおらず、息子たちで均分相続した

タイプ 3:

息子と娘に相続、かつそれ以外にも相続者がいたケース。

事例: 0910FKS01（1956 生）：息子と娘と叔父が均分相続した

タイプ 4:

息子と娘に相続、しかし息子間で土地分配が均分か否かをそもそも考慮する必要がなかったケース。

事例: 0904FJT01（1958 生）：子供 3 人（息子 1 人と娘 2 人）。息子が 14,000 m<sup>2</sup>を相続、娘がそれぞれ 2,000 m<sup>2</sup>ずつ相続した

タイプ 5:

娘のみ相続、かつ世帯内に息子がいなかったケース。意図的に息子が除外されたわけではないケース（タイプ 0 とタイプ 2 に類似）。

事例: 0905SNT01（1944 生）：息子がおらず、娘たちで均分相続した  
0906SNT01（1973 生）：息子がおらず、娘たちで相続。末娘が最大相続した

事例がもっとも多かった相続タイプは、「息子のみ相続で、娘は意図的に除外され、息子間で均分相続」するというものだった（8 事例）。また、「息子と娘が相続で、かつ不均等相続（息子間、娘間は均分だが、息子と娘とを比較するとどちらかが多くなるように配分）」するという事例も同数あった（8 事例）。次いで、「息子と娘が相続で、かつ均分相続」というタイプが 6 事例あり、「息子のみ相続で、娘は意図的に除外され、かつ息子間で不均等相続（長男か末息子のどちらかが最大になるように相続）」するというタイプが 6 事例あった。比較的に事例の多かったこれらの 4 つの相続タイプについて、インフォーマントの平均年齢を割り出して流行を時系列化した（図 1.）。「娘のみ

相続で、息子は意図的に除外」するという事例は1軒もみられなかった（表2.）。

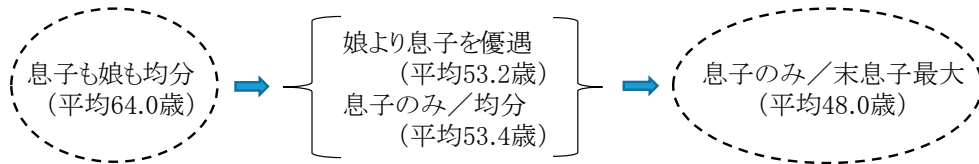


図1. インフォーマントの平均年齢からみた相続タイプの流行の推移

表2. 相続タイプと各インフォーマントの出生年

	均分／ほぼ均分 (出生年)	不均等 (出生年)	その他 (出生年)
息子のみ相続  (平均54.3歳)	0905FJT01 (1949)	長男を優遇	0906FKS02 (1937)
	0904FKS01 (1950)	0906SNT02 (1951)	0908SNT02 (1937)
	0911SNT01 (1957)	末息子を優遇	0908TSW02 (1960)
	0908TNG01 (1958)	0904TKR01 (1958)	0909TSW01 (1961)
	0906TKR01 (1965)	0910TSW02 (1960)	0909FKS02 (1962)
	0910FKS02 (1966)	0910TKR01 (1960?)	0908FKS01 (1964)
	0903TKR01 (1968)	0911FKS01 (1967)	0903FKS02 (1966)
	0903SNT02 (1972)	0904FKS02 (1985)	
	(平均53.4歳)	(平均50.5歳)	(平均58.7歳)
息子と娘が相続  (平均57.4歳)	0910TSW01 (1935)	息子を優遇	均分／ほぼ均分
	0905FKS02 (1941)	0906FJK02 (1932)	0910FKS01 (1956)
	0905FKS01 (1942)	0903FJT01 (1952)	不均等
	0908FKS02 (1950)	0909SNT01 (1964)	0904FJT01 (1958)
	0909TNG01 (1964)	0908TSW01 (1965)	
	0908SNT01 (1968)	0903SNT01 (1974)	
		0904FJT02 (1979)	
		娘を優遇	
	(平均64.0歳)	(平均53.0歳)	(平均57.0歳)
娘のみ相続  (平均55.5歳)	なし	なし	均分／ほぼ均分
			0905SNT01 (1944)
			不均等
	(一)	(一)	(平均55.5歳)

註1. 0905TKR01\*と0905TKR02\*は姉妹。独立するまで共通の父母世帯に属しており、

0905TKR01\*と 0905TKR02\*は合わせて一つの事例であり、分立してカウントすることができない。本表は、表に記した出生年のインフォーマントがインフォーマントの息子や娘に土地を分け与えたときの相続タイプ分類ではなく、各インフォーマントがインフォーマントの両親から土地を分け与えられたときの相続タイプ分類である

註 2. 宅地相続を除く農地相続で分類した。宅地の面積が農地と区別できない不明瞭なデータを一部含む

註 3. 0903、0904、0905、0906 は A 集落の事例、0908、0909、0910、0911 は B 集落の事例である

註 4. インタビューの担当は、FJK は藤倉班、FJT は藤田班、FKS は福島班、SNT は新谷班、TKR は高良班、TNG は谷口班、TSW は勅使河原班である

表 2. のとおり、「息子と娘が相続」した世帯をみると、男女均分が約半数あり、一方で娘よりも息子を優遇する不均等な土地相続をおこなう世帯が約半数みられた。「息子と娘が相続」するよりも「息子のみ相続」する世帯がわずかに多く報告された。

「(娘を意図的に除外して) 息子のみ相続、息子間で均分」というタイプと、「息子と娘が相続で、不均等相続」というタイプとが、事例としてもっとも多くみられた。他のタイプと比べて格段に事例数が多いというわけではないが、各インフォーマントの意思を明確に伝えるデータとして示されたものであり、興味深い結果といえる。息子あるいは娘が、意図的に除外されたといえない事例については「その他」に分類した。

「末息子が最大相続」タイプは、インフォーマント 5 人の平均年齢が 48 歳と比較的に若かった。1958 年生まれのインフォーマントが 1978 年に土地を相続した A 集落の事例が最初である。一方で、「息子と娘が均分相続」タイプは、インフォーマント 6 人の平均年齢が 64 歳と比較的に高かった。1935 年生まれのインフォーマントが 1963 年に土地を相続した B 集落の事例が最初である。

インフォーマントによると、土地の分割を検討するのは、息子あるいは娘が婚出して新しい世帯を設けるときである。分配するだけの土地が十分にあるかどうか、あるいは息子や娘が農地を相続する以外に選択肢があるかなど

が考慮された上で、息子間または娘間で配分を均衡させようとしていた。あるいは息子娘間で均衡させようとしていた。さらに忘れてはならないことは、土地相続後に老親を扶養することが期待されていたということである。息子や娘に土地を割り当てることと、だれが老親を扶養するかという目途を立てることとは、同時におこなわれていた。老親や先祖供養の墓地の世話に関する規制を働かせるために土地相続が利用できると考えているようであった。

#### 4. 考察

先述した相続タイプは、相続者である息子と娘の相続状況に基づき分類したものである。この分類には、息子や娘の結婚相手となる配偶者が、配偶者自身の両親から相続した土地に関する情報が含まれていない。息子と娘のあいだで不均等な土地相続がおこなわれていることをすでに指摘したが、息子夫婦あるいは娘夫婦という単位で比較したならば、息子と娘のあいだで「均分／ほぼ均分」の相続がなされているケースがあるかもしれない。

土地相続にはさらに複雑なケースがある。調査した世帯のなかには、女性が戸主というケースが散見された。調査ではライフヒストリーの聞取りに重点を置かなかつたため、母子家庭の世帯が離婚によるものなのか死別によるものなのか判別できない。また再婚の経緯や、夫が婿養子かどうかなど判然としない。いずれにせよ、女性が戸主の場合に、戸主が保有する土地と世帯全体が保有する土地とが一致しないことがある。これは、たとえば再婚したときに土地名義を統一しないためであろう。夫と妻がそれぞれ別々に土地を保有しつづけるわけである。このことが、息子と娘への土地相続の際になんらかの影響を与えると考えられ、また相続の際にトラブルの種にもなりうる。夫婦が土地を分割保有することにより世帯内で戸主の権限が弱まることになり、土地保有における行政の仲裁の役割の増大や、家族形成に関し行政が介入する余地を拡大することにつながる。現状における夫婦の土地の分割保有は、行政によるこれまでの土地施策がもたらしたものともいえるのだが、土地政策との因果関係を述べるには、さらに詳しい調査が必要である。



土地を割り当てた後の老親扶養と先祖供養に関連して、農地のなかに先祖の墓標を祀るという当該地域の慣習が次世代に土地を相続させたいとする意識に影響を与えていると考えられる（写真 6.）。農家が土地を売却したり抵当に入れたりすることを難しくさせている要因にもなっているだろう。今回の調査で、稲作から果樹栽培への転換で莫大な投資を強いられた農家があるにもかかわらず、土地を担保に資金調達する農家がほとんどなかったことと関係しているかもしれない。



写真 6. 果樹園（ドラゴンフルーツ）のなかの墓標（撮影：富塚あや子）

フランス植民地期に、少数の地主が広大な土地を所有した。現在、多くの農家が土地を所有しているのは、相続と開拓、南政府による農地改革、解放政権による農地調整、合作社に供出した土地の返還、また脱集団化後に個人的に購入したことによる。他方で、農家が土地を手放したのは、水路・道路整備のための一部供出（写真 7.、写真 8.）、南政府の農地改革、解放政権の農地調整、集団化による合作社への供出、また脱集団化後に個人的に売却したことによる。いずれにせよ、増減の結果、父母が保有した土地が父母から相続者に分割相続された。土地は、相続者が結婚するときか、または父母が死去したタイミングで相続された。こ



写真 7. 整備された水路（1）（筆者撮影）



写真 8. 整備された水路（2）（筆者撮影）



のタイミングの違いは、父母が死去するときまで父母と同居したか否かの違いによって生じている。父母の死去まで父母と同居したのは、長男か末息子または末娘だった。父母の死去まで父母と同居した相続者は、父母の農地だけでなく、父母の宅地も相続するケースが多かった。

## 5. 結論

メコンデルタ農村において、親族を維持・拡大するために、土地相続はいまなお一定の効力を有するといえる。しかしながら、息子と娘への均分相続という慣行は減少傾向にあり、もはやメコンデルタの農家の一般的な姿だとは言えなくなっている。多様な相続形態がみられたことは、農家が土地の有効な分割方法について腐心した結果であり、またその現れだといえるのではないか。現状として、農家を継がない息子世帯、娘世帯を増加させている。

本調査から、1900年代半ばにみられた男女均分相続が、近年では減少し、息子のみに相続する事例が目立ってきたことを指摘した。なかでも末息子が最大相続するタイプが増加傾向にあるようである。さらに詳しい調査を追加的におこなうならば、メコンデルタにおける農家の地域固有性について、土地相続の慣行を手掛かりに他の地域との比較が可能な程度に一般化できるだろう。

## 参考資料

宇戸優美子. 2014. 「タンビントン社における土地の相続と分配」 アジア農村研究会編『アジア農村研究会第22回調査実習ベトナム・メコンデルタ農村調査報告書』, 43-44.

富塚あや子. 2014. 「タンビントン村における土地所有の変遷」 アジア農村研究会編『アジア農村研究会第22回調査実習ベトナム・メコンデルタ農村調査報告書』, 38-42.

藤倉哲郎. 2014. 「事前調査の報告及び本調査のテーマ設定」 事前合宿資料 2014.7.27., 東海大学山中湖セミナーハウス, 29.

\_\_\_\_\_. 2014. 「ティエンザン調査実習の準備から報告会までの流れ」 アジア農村研究会編『アジア農村研究会第22回調査実習ベトナム・メコンデルタ農村調査報告書』, 7-19.

柳澤雅之. 2014. 「アジア農村研究会によるベトナム・ティエンザン省における研究交流の成果」アジア農村研究会編『アジア農村研究会第22回調査実習ベトナム・メコンデルタ農村調査報告書』, 20-23.

## 付記

本稿は、アジア農村研究会第22回調査実習の成果に基づいて執筆された。本調査メンバーは次の通り。伊藤未帆、宇戸優美子、桜井三恵子、佐藤章太、渋谷由紀、新谷春乃、瀬戸徐映里奈、高良大輔、田中李歩、谷口友季子、勅使河原章、富塚あや子、新美達也、福島直樹、藤倉哲郎（団長）、藤田幸一、Vo Minh Vu、松崎圭、柳沢雅之（顧問）、山口哲由



写真 9. 村人とアジア農村研究会メンバー  
(撮影：富塚あや子)

# **Gender Analysis In Agriculture Commodities Management In the State Forest of Kayu Loe Village, Bantaeng District, Bantaeng Regency**

Erni<sup>1</sup>, Novaty Eny Dunga<sup>2</sup>, Supratman<sup>3</sup>

**Keywords:** gender, commodities management, farmers knowledge

## **Abstract**

Gender Analysis in Agriculture Commodities Management in the State Forest of Kayu Loe Village, Bantaeng District, Bantaeng Regency. This study provides an overview of gender aspects, including influential factors and impact, in the use of -state- owned forest areas. The research was conducted in Kayu Loe Village using a qualitative method based on the following steps: (1) document/report review, (2) direct observation, (3) focused group discussion, and (4) in-depth interviews. The results indicate that gender in agricultural commodity management in the forest area is in a relatively balanced condition. There are, however, different levels participation by women and men in each commodity. For example, women monopolize the job of taking candlenuts; while men dominate the work performed in coffee plants. Meanwhile, training and capacity building are dominated by men. As a result of women's limited access to such programs, women have limited skills in the commodity management in state forest area.

## **1. Introduction**

Bantaeng Regency has 6,222 hectares of forest spanning five districts, specifically Ulu Ere district, which consists of 2,057 hectares of protected forest and 843 hectares of production forest; 788 hectares of production forest in Eremerasa district; 710 hectares of production forest in Sinoa district; 702 hectares of protected

---

<sup>1</sup> Graduate Student of Land and Resources, Agricultural Systems, Postgraduate Hasanuddin University

<sup>2</sup> Lecturer in Agricultural Faculty and Magister Gender and Development Hasanuddin University

<sup>3</sup> Lecturer in Forestry Faculty Hasanuddin University

forest in Tompobulu district and 364 hectares of production forest in Bantaeng district. These forest areas span 17 villages, with 264 hectares located in Kayu Loe village [Bidang Hutan 2012]. Kayu Loe village has a total area of 526.09 km<sup>2</sup>, of which 264 hectares are state-owned forest, while the rest is community-owned land primarily used for agriculture and settlement. Of the 264 hectares of state-owned forest, 263 managed by local people. According to Forest Sector Development [Bidang Hutan 2012], there are 133 families whose livelihoods and economic lives depend on this forest.

In Kayu Loe village there is a sub-village named Bonto Buakang, which lies within the area of state-owned forest. There are three additional sub-villages located adjacent to the forest area: Kayu Loe (same name as the primary village), Parang Labbua, and Kassi-Kassi. Based on the *RPJM Des* (Village Mid-term of Development Plan) of Kayu Loe village, 95% of its inhabitants are farmers, while the rest work as laborers. People who live in the forest plant crops, most of which are corn. Other crops include coffee, cloves, cocoa, hazelnut, jackfruit, and vegetables. Besides agricultural commodities, the forest has also become a source of timber, and livestock resources for the local people [Mubyarto 2004].

In managing the state-owned forest in Kayu Loe village, women participate almost as much as men. For example, women get involved in land clearing as well as planting, maintaining, and harvesting crops. Based on assumption that "farmers are men" in the official census data of Kayu Loe village in 2012, however, women's work is listed as housewives, even though they work also as farmers. This has led to a lack of women's inclusion in training and extension activities.

Similar gender biases occur also within the Forest Service and some non-governmental organizations (NGOs) [Bahriyah 2006, Balang 2011]. It indicates a lack of women's involvement in official activities carried out by the government and other parties in the decision-making process, capacity building, and land use planning, especially for the forestry and agriculture sector. Consequently, women lose the opportunity to gain knowledge regarding the management of state-owned forest, and it simultaneously marginalizes women from the decision-making process regarding rural development. This situation neglects their interest in the control and management of local lands. In turn, it could also result in low productivity of the

land.

Based on the description above, this research provides an overview of gender mainstreaming in state-owned forest use, including factors that influences and impact it.

## **2. Methods**

The research was conducted in Kayu Loe village, Bantaeng district, Bantaeng Regency in South Sulawesi from October to November 2013.

Data collection was carried out in the Department of Forestry and Plantation and the Department of Agriculture and Livestock of Bantaeng Regency, as well as with some relevant NGOs.

### **Observation**

Field observations were conducted to record information regarding the socio-cultural and physical environments. Data were recorded based on the social setting, activities that took place, the people who were involved in the activity, and the meaning of events from the perspective of the farmers.

### **Focused group discussions**

Focused group discussion were conducted among key informants to collect additional data and information.

### **In-depth interviews**

In-depth interviews were carried out with informants using a prepared interview guideline on the role and control of both women and men in the communities, as well as their productive and reproductive aspects.

## **3. Results and Discussion**

### **3-1. Result**

Identifying the gender division of responsibility for both labor and management is crucial because the segmentation of control and responsibility has practical effects. Technical assistance given to farmers that ignores the busiest hours

of non-farm work for women will lead to failure in efforts to increase household income. In rural communities, the multiple roles of women are easily recognized; for example, women also have to work in the farmland to obtain additional income required for daily life.

In the reproductive sphere, women have a greater workload and time commitment than men. Taking care of the home, raising children, caring for the elderly and sick are almost entirely done by women. In addition, women have to cook meals and wash clothes for their husband and children.

Women's busiest hours are between 5:00 am and 1:30 pm, and between 4:00 pm to 7:00 pm, (a total 11.5 hours). Their leisure time is between 1:30 pm to 4:00 pm and between 7:00 pm to 9:00 pm (a total of 4.5 hours). In this spare time, women usually do gardening and engage in social interactions. The only possible chance for them to participate in training and meeting, then, is during this spare time.

For productive activities in general, there is a balanced pattern of labor division between men and women. Some tasks are dominated by women, as seen in cultivated plants such as corn and vegetables, chili, and hazelnut. Males generally dominate the cultivation of lemongrass as the garden's barrier, and annual plantings such as coffee. These tasks are both time consuming and labor intensive, which is why women need to participate in farming work.

The above-mentioned plants are important commodities for every household. Lemongrass and coffee have higher selling prices. Women participate in the farm field not only for economic purposes but also for daily needs fulfillment, either for consumption purposes or as herbal medicine for the household.

The different roles of women and men in the crops management are also visible in fertilizer and pesticide application. Men have more knowledge about the materials and form of pesticide, while women primarily gather water as the mixture material and spread the fertilizer. Research shows that the application of modern agricultural technology has marginalized and even eliminated women's access and control of farming, especially regarding aspects of cultivation.

Social activities in this research refer to village meetings and farmer group extension/training. Approximately 90% of these meetings are dominated by men, and only between 2 and 3 out of 30 participants in the village meetings are women.

(these primarily come from office staff). The low participation of women is because the farmer groups list only members that are heads of households, and this role is generally held by males. Women are rarely invited to these events.

Gender problems in other meetings held by related agencies are also caused by the schedule itself. Meetings are usually held during women's busy hours, between 09:00 am to 1:00 pm; hence, there should be a rescheduling or time adjustment to allow women to be more involved.

Indeed, not all training or extension must be attended by women as there are some example of training or extensions that are only reserved for women. However, any training intended for both for men and women must at least involve a 30% quota of women's participation. The low number of women's representation will have an impact on decision-making processes and productivity [De Vries dan Nurul, 2006]. Furthermore, women's aspirations are not accommodated in agreements reached during the meetings. The perception that women have a lower level of knowledge causes them to be frequently neglected in this role which can result in less contribution to household productivities.

Participation in training consists of two levels of participation: low and high. The low level reflects an attitude of silence during the training, rarely active in speaking, and assigned to prepare food. The high level of participation, on the other hand, reflects giving opinion, interrupting, raising questions, writing notes, making decisions, and even leading the meeting.

The tendency of women to not speak actively or share opinion remains strong. They are specialized in cooking and preparing food, which significantly erodes their knowledge and ability during the trainings.

Objectively, women have very low confidence in speaking their mind during trainings. This will get worse if meetings are attended by participants who come from other villages or external sides. Language barriers are also becoming a problem. Speaking actively in *bahasa Indonesia* is not a common habit for most rural people; therefore, it causes women to be even further ignored in raising their opinion and arguments.



Given this reality, we need to hold women-only trainings that are conducted during their spare time between 1:30 pm and 4:00 pm, or between 7:30 pm and 9:00 pm.

### **3-2. Discussion**

#### **Contributing factors on the management of agricultural commodities in state-owned forest of Kayu Loe village.**

This study reveals gender differences in the management of agricultural commodities, depending on the type of commodities developed. Gender differences in the state-owned forest area not a given reality; rather, there is a particular background behind them.

One of the factors that influence gender in the management of agricultural commodities in the state-owned forest is the results of population census data. During my fieldwork, the data primarily included women only as a Housewife (IRT), while the women who worked in agriculture were not included. This leads to not only the committees and members of farmer groups being almost entirely male, but also those invited to the meetings/trainings. This has implications for women's knowledge and skills in the management of agricultural commodities in the state-owned forest.

A Presidential Decree in 2000 requires that gender mainstreaming activities should be considered in every ministry. Various rules regarding gender mainstreaming have been made by the government at both the national and provincial levels, even to the district level. The implementation of these rules, however, is not yet completed, so gender inequality remains strong.

As an example, the lack of understanding from those who create the training programs regarding women's roles, work hours, and their household activities has resulted in the difficulty of women to actively participate in these programs. Women cannot be present because they are busy carrying out domestic roles (such as cooking and cleaning) during the time these meetings and trainings are being held.

The perception that the forestry sector is very masculine has led to the notion that only men should have access to forest management and to participate actively. Farmers respond to any changes in pricing by either increasing or expanding

production. Increased production can be achieved through an increase in the planting area or an increase in productivity per unit area.

Change or development of crop varieties can affect the employment of women or men; similarly, the introduction of technology used or technology transfer can cause women or men to be marginalized. Not to mention that various results or activities could increase the workload of women or men.

In Kayu Loe village, cultivation is still conducted through collective activities by women and men, but the heavy work is done by males. They carry and transport the crops while the management of production is done by women.

In many ways, women and men have different scopes of knowledge and skills and different access to and methods in managing local resources. So if you want to understand the situation thoroughly, then one must be aware of the reality of women's activities, collective activities (women and men), and the activities exclusive to men. In order to participate, women and men are limited by factors such as political policy, culture, religious norms, and others.

When understood correctly, the participation problem can be minimized and lead to a harmonious relationship between women and men. This positive result can be obtained if women have more access and control at all stages of learning, the planning process, implementation, monitoring, and evaluation of the training programs. Gender responsive planning attempts to insert different experiences, aspirations, needs and concerns of both women and men in the drafting process [Bemmelen 2009].

### **The impact of gender differences in the management of agricultural commodities in Kayu Loe village**

Gender differences would not be a concern or important consideration if they were not harmful to women's interest; in this case, the interest of women farmers. Gender differences, involve access, participation, control, and benefit in Kayu Loe village, and have become crucial because they have created gender injustice in the community and poor policy planning at the institutional level.

The assumption that farmers must be men, accompanied by the likes of that wife's role primarily being a housewife (i.e., farming work by women is only seem

as complementary) have laid the basis of disparity in women's participation. Women experience subordinated or diminished roles in almost all aspects of farming in the village. The involvement of women in public spaces such as meetings, trainings, farmer group membership, group unions, and others are very limited. Marginalization also happens frequently in the field of production. The assumption that women work only for themselves or as secondary earners causes many women to take jobs that are not strategic. Although there is an increasing number of women working in the social area, this is not accompanied by a workload reduction in reproductive realm.

#### **4. Conclusion and suggestion**

Based on the results, this study concludes that women and men work collectively on land management in state-owned forests in Kayu Loe village, Bantaeng District. Women's and men's participation, however, is different for each commodity produced. Women monopolize the role of planting crops like-hazelnuts, while men dominate the work of planting coffee. A more balanced participation can be seen in the cultivation of chili and corn. The access to means of production, meetings, capacity building, and training are dominated by men, due to an almost exclusive male membership to farmer groups. Population census data also officially exclude women from the farming profession, or show them as unregistered in some legal documents, which inhibits their roles in training and capacity building. Domestic tasks of women as housewife and farmer at the same time leads to harder work and less free time for women. Therefore, to increase women's participation, some crucial points have to be taken in to account. First, fixing the census data regarding women's professional status by relevant institution; such as exclusive events for women that consider a compatible schedule and venue outside of their busy hours.

## References

- Bahriyah, L. Z. 2006. Analisis Gender Dalam Kegiatan Pengelolaan Hutan Bersama Masyarakat (PHBM) (Kasus Di Desa Pulosari, RPH Pangalengan, BKPH Pangalengan, KPH Bandung Selatan, Perum Perhutani Unit III Jawa Barat dan Banten). Fak.Kehutanan, Institut Pertanian Bogor.
- Balang. 2011. Laporan kegiatan, Pertemuan Hutan Desadan HKm Kab. Bantaeng. Laporan tidak diterbitkan. Makassar.
- Bemmelen, Sita van. 2009. Menuju Masyarakat Adil Gender. Veco Indonesia.
- Bidang Hutan. 2012. Hutan dalam Angka. Dinas Kehutanan dan Perkebunan. Kab. Bantaeng.
- De Vries D. W dan S. Nurul. 2006. Adil Gender, mengungkap realitas perempuan Jambi. Jurnal Governance Brief CIFOR, no. 29 B.
- Mubyarto. 2004. Ekonomi Rakyat Dan Reformasi Kebijakan. (online) [www.ekonomirakyat.org](http://www.ekonomirakyat.org). Diakses tanggal 10 September 2013.



## おわりに

---

本研究集会は、京都大学学際融合教育研究推進センター・総合地域研究ユニット・臨地研究支援センターによる「国際研究発信力強化プログラム」から支援を受けて実現した。研究集会の開催から成果報告書の完成に至るまでは、多くの方々の協力を得た。発表者の人選、会場の準備と広報、議事の進行等、ハサヌディン大学の教職員の方々、とりわけ **Andi Amri** 先生に多大なるご尽力をいただいた。また、決して十分とは言えない準備期間にも関わらず、学生の方々に発表を引き受けていただき、本報告書への原稿をまとめていただいた。ハサヌディン大学からの全面的な協力がなければ、学术交流としての本研究集会の目的は十分に達成できなかった。そして、集会当日、活発な議論を盛り上げてくださったすべての参加者の方々に感謝したい。

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科の藤倉達郎先生は、私たちのアドバイザーを快く引き受けていただいた。準備段階から報告書の完成まで、長期にわたって私たちの活動を支えてくれたのは、同センターの山本佳奈さん、鈴木遥さん、中村香子さんである。臨地教育支援センターの皆さまには、最初から最後まで辛抱強くサポートしていただいた。私たちの取り組みに協力してくださったすべての方々に深く感謝申し上げる。

二ツ山はオリーブ、**Iwan Sumatri** は食生活、西島は地方王権、**Triyatni Martosenjoyo** は公衆衛生、**Wahyudin** は環境汚染、福島は土地相続、**Erni** は農村の共有地に着目し、調査地の人々の日々の営みが、どのように「地域」内外の「ネットワーク」と結びついているのかを、民族誌の記述の中に再構築する方法について考えてきた。本研究集会で、調査地域も調査対象も異なる発表者が活発な議論を展開し各々の研究を深化させることが出来たことで、地域研究の可能性について改めて感じる事が出来た。人と地域が織りなす「ネットワーク」の民族誌を比較研究する地域横断的な学際チームとして、これからも研究交流を続けていきたい。

2015 年 3 月

飯田玲子

西島薫

福島直樹

二ツ山達朗





**表紙掲載写真：**

日本・京都、2015 年 2 月、二ツ山撮影

**裏表紙掲載写真：**

インドネシア・マカッサル、2015 年 3 月、二ツ山撮影

---

2014 年度 国際研究発信力強化プログラム リサーチ C&M 報告書  
2014 Report of Research Collaboration & Management Support  
Course for International Research Output Training

地域研究の民族誌的記述の再考

ー地域の実践からひろがるネットワークー

Reconsidering Ethnography in Area Studies: From Local Practice to  
Wider Network

Date of Issue: March 20, 2015

Publisher:

Center for On-Site Education and Research, Integrated Area Studies Unit, Center for the  
Promotion of Interdisciplinary Education and Research, Kyoto University

Tel: +81 75-753-9636 / FAX: +81 75-753-9655

E-mail: shien@asafas.kyoto-u.ac.jp

Printer: Nakanishi Printing Company

ISBN: 978-4-905518-15-0

---